

# 平成13年度独立行政法人国立美術館事業報告書

独立行政法人国立美術館の概要-----	1
1 設置目的	
2 事業内容	
(1) 美術館の設置	
(2) 収集・保管	
(3) 公衆への観覧	
(4) 調査及び研究	
(5) 教育普及	
(6) その他の事業	
3 事業所の所在地	
4 資本金	
5 役員の定員数(氏名, 役職, 任期, 経歴)	
6 職員の定数	
7 組織図	
8 設立に係る根拠法	
9 所管省庁名	
10 独立行政法人国立美術館組織図	
事業の実施状況-----	5
決算の概要-----	5 2
対処すべき課題-----	5 4

# 平成13年度独立行政法人国立美術館事業報告書

## 独立行政法人国立美術館の概要

### 1 設置目的

独立行政法人国立美術館（以下「国立美術館」という。）は、美術館を設置して、美術（映画を含む。以下同じ。）に関する作品その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行うことにより、芸術その他の文化の振興を図ることを目的とする。（独立行政法人国立美術館法第3条）

設立年月日 平成13年4月1日 独立行政法人国立美術館法に基づき設置。

#### 目 的

独立行政法人国立美術館は、我が国における美術振興、芸術文化振興の中心的拠点として、優れた美術作品を最良の状態でも可能な限り多くの人々の鑑賞に供するという使命の下に、国民の多様化するニーズを踏まえ、現代の美術を取り巻く状況の変化に対応した多彩な活動を展開していく。

このため、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館の4館を設置し、それぞれの美術館の理念・目的に基づき、調査・研究機能を重視し、調査結果や研究成果を基に、美術作品等の収集・保管・修理・展示、教育普及事業等を有機的・体系的に行う。

また、生涯学習の推進や、国際文化交流の振興に積極的に取り組むとともに、我が国における美術館のナショナルセンターとしての役割を果たしていく。

### 2 事業内容

#### (1) 美術館の設置

東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立国際美術館を設置すること。

#### (2) 収集・保管

美術に関する作品その他の資料を収集し、保管すること。

#### (3) 公衆への観覧

美術に関する作品その他の資料を一般の観覧に供すること

国立美術館が設置する美術館以外の場所において、美術作品を一般の観覧に供すること。

美術作品その他の資料を国内外の美術館等と貸借すること。

#### (4) 調査及び研究

美術に関する調査及び研究

美術作品の保存及び管理方法並びに展示方法に関する調査及び研究

その他美術作品の収集、保管及び一般への観覧の充実に資する調査及び研究

#### (5) 教育普及

図書、学術刊行物、研究成果報告書、写真、磁気テープ、光ディスク等の情報及び資料を収集すること。

収集及び整理した情報及び資料を閲覧、講演会、刊行物、ホームページその他の方法を用いて一般の利用に提供する。

講演会、講座、シンポジウム、列品解説等を行うこと。

定期刊行物、展覧会目録、研究論文、調査報告書、パンフレット、ガイドブック等を刊行すること。

(6) その他の事業

美術館を芸術その他の文化の振興を目的とする事業の利用に供すること。

国内外の美術館その他これに類する施設の職員の資質の向上を図るため、学芸担当職員(キュレーター)等を対象とする研修を行うとともに、他の博物館・美術館等が行う研修への協力を行うこと。

国内外の美術館その他これに類する施設の求めに応じて援助及び助言を行う。

美術館運営に伴う業務に附帯する業務を行う。

3 事業所の所在地

国立美術館本部 東京都千代田区北の丸公園3番1号

東京国立近代美術館 東京都千代田区北の丸公園3番1号

京都国立近代美術館 京都府京都市左京区岡崎円勝寺町

国立西洋美術館 東京都台東区上野公園7番7号

国立国際美術館 大阪府吹田市千里万博公園10番4号

4 資本金

336億4,894万8,564円

5 役員の定数等(氏名、役職、任期、経歴)

6人

役職	氏名	任期	経歴
理事長	辻村哲夫	平成13年7月1日～ 平成17年3月31日	昭和42年4月 文部省入省 平成8年7月 初等中等教育局長 平成11年7月 東京国立近代美術館長 平成13年7月 独立行政法人国立美術館理事長 (東京国立近代美術館長)
理事	内山武夫	平成13年4月1日～ 平成17年3月31日	昭和40年4月 国立近代美術館採用 平成10年4月 京都国立近代美術館長 平成13年4月 独立行政法人国立美術館理事 (京都国立近代美術館長)
理事	権山紘一	平成13年7月1日～ 平成17年3月31日	昭和44年12月 京都大学採用 昭和51年4月 東京大学助教授 平成2年8月 東京大学教授 平成13年7月 独立行政法人国立美術館理事

			(国立西洋美術館長)
理事	宮島久雄	平成13年4月1日～ 平成17年3月31日	昭和38年4月 京都市立日吉ヶ丘高等学校 教諭 昭和41年4月 大阪芸術大学採用 昭和46年4月 大阪芸術大学助教授 昭和51年9月 文化庁入庁 昭和60年11月 京都工芸繊維大学助教授 平成元年4月 京都工芸繊維大学教授 平成8年4月 京都大学教授 平成10年4月 国立国際美術館長 平成13年4月 独立行政法人国立美術館理事 (国立国際美術館長)
監事(非常勤)	真室佳武	平成13年4月1日～ 平成15年3月31日	昭和40年3月 東京芸術大学採用 昭和51年3月 群馬県立近代美術館 昭和61年7月 東京都美術館 平成6年4月 東京都美術館副館長 平成7年4月 東京都美術館館長 (～現在に至る) 平成13年4月 独立行政法人国立美術館監事
監事(非常勤)	和田義博	平成13年4月1日～ 平成15年3月31日	昭和39年4月 公認会計士鈴木貞一郎事務所 入所 昭和50年4月 公認会計士・税理士和田義博事 務所開業 (～現在に至る) 平成13年4月 独立行政法人国立美術館監事

## 6 職員の定数

115名(役員を除く。)

## 7 組織図

次ページのとおり

## 8 設立に係る根拠法

独立行政法人通則法(平成11年7月16日法律第103号)

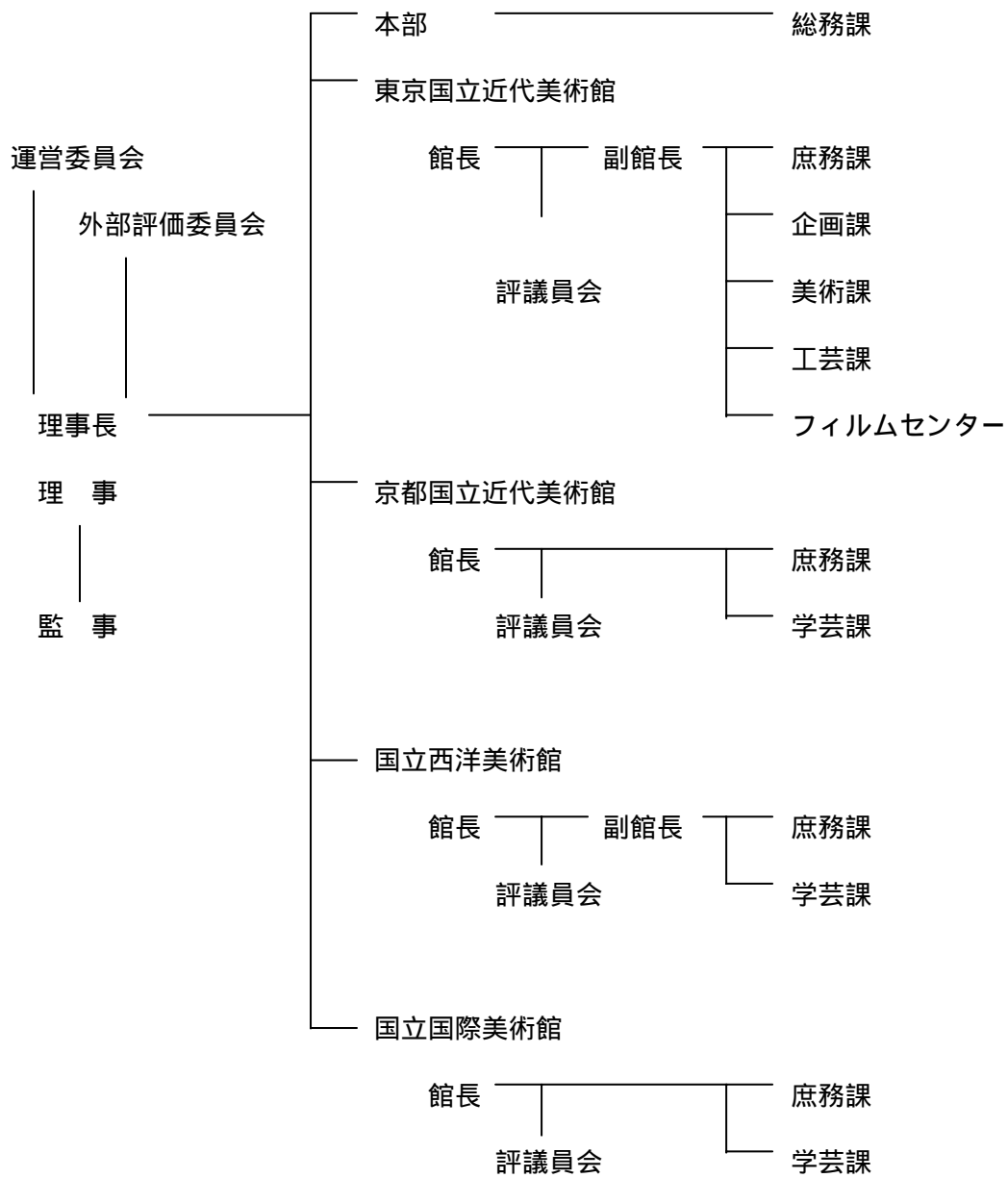
独立行政法人国立美術館法(平成11年12月23日法律第177号)

## 9 所管省庁名

文部科学省

10. 独立行政法人国立美術館組織図

H13.4.1現在



## 事業の実施状況

### 1 東京国立近代美術館本館・工芸館

#### 1 収集・保管

##### (1) 美術作品等の購入

###### [本館]

近代日本の美術がたどれるように、収蔵品を体系的に充実させるという基本的な収集方針に基づき、平成13年度においては、美術作品購入等選考委員会及び評価員会(美術・写真部門)の審議を踏まえ、楠木清方《明治風俗十二ヶ月》等83点を、計200,390,600円で購入した。寄贈作品についても同様の手続きにより、当館の収蔵品にふさわしい作品として認められた作品20点について、寄贈受入の手続きを行った。

###### [工芸館]

戦後の現代工芸系を中心にした体系的な近代工芸作品とモダンデザインの作品を収集するという基本的な収集方針に基づき、工芸作品及びデザイン作品について美術作品購入等選考委員会及び評価員会(工芸部門)の審議を踏まえ、井上雅之《タイトルなし》等30点を計28,918,500円で購入した。寄贈作品についても同様の手続きにより、当館の収蔵品にふさわしい作品として認められた作品13点について寄贈受入の手続きを行った。

##### (2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

寄託については、1年毎の契約としている。本年度は、82件、193点の寄託契約の更新を行い、新たに4件、9点(洋画8点、写真1点)の寄託作品の受入れを行った。

これらの作品については「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展で1点ならびに本年度末に始まった常設展示で4点、計5点を展示し、寄贈品は出品作品の約3割を展示した。

##### (3) 作品の保存管理

会場内では、作品を安全に展示するために館内の温度・湿度を常に適正な数値で管理した。また、空気汚染、照明等にも留意し、防災対策、保安対策に努めた。

保存庫は、温度・湿度についての数値を管理し、作品への影響を最低限とするよう空調管理を行った。

##### (4) 収蔵品修復

###### [本館]

平成13年度は、常設展示や貸出に備えて早急に修復措置を要する作品の中から、日本画4点、洋画2点、水彩・素描ほか15点、版画4点、彫刻3点の修理を行った。

###### [工芸館]

陳列等に比較的繁多に活用され早急に保存修復の措置が必要であった戦後の伝統工芸の主要作品から選択し、漆工作品14点の修理を行った。

#### 2 公衆への観覧

##### (1) 展覧会の実施

「現代ポーランド・ポスター」展

期間：平成13年4月3日(火)～5月6日(日)(30日間)

会場：フィルムセンター7階展示室

出品点数：75点

入館者数：763人(1日平均25人)(目標入場者数：780人)

戦後、ポーランドのポスターは国際的にも高い評価を確立し、注目を集めてきた。特に1960年代は“ポーランド派ポスター”と称されたように、その黄金時代であり、また70年代から80年代にかけては、怪奇と幻想とも言うべき独特のスタイルで、世界にそ

の存在が知られた。今回は、当館の所蔵品のなかから、現代のポーランドのポスター約70点を展示し、その独特の世界を示そうとした。ヴァルデマル・シフィエジ、アンジェイ・ボンゴフスキ、ヤン・レニツァなど。

#### 「写真再発見2」

期間：平成13年5月15日(火)～8月5日(日)(72日間)  
会場：フィルムセンター7階展示室  
出品点数：136点  
入館者数：3,118人(1日平均43人)(目標入場者数：2,640人)

写真というメディアのもつ魅力と可能性を、身近なところから掘り起こす試みとして、「写真再発見」と名づけてコレクションの活用を図った小企画展。

展覧会は所蔵作品から国内外の写真家の作品によって構成され、「1. ヒト」(11作家20点)、「2. モノ」(14作家24点)、「3. 場所とできごと」(9作家27点)の三章と、石元泰博<シカゴ、シカゴ>(25点) 須田一政<風姿花伝>(32点)の二つのシリーズの小特集、全124点を展示した。小特集は会期の途中で展示替えを行った。(前期：5月15日 - 6月24日石元泰博<シカゴ、シカゴ>、後期：6月26日 - 8月5日須田一政<風姿花伝>) 会場で配布するパンフレットには章ごとの解説を掲載し、また会場内には各章の作品のうち数点を選んで、鑑賞のヒントとなるような解説プレートを掲示した。

#### 「1930年代日本の印刷デザイン - 大衆社会における伝達」

期間：平成13年8月14日(火)～11月4日(日)(72日間)  
会場：フィルムセンター7階展示室  
出品点数：108点  
入館者数3,169人(1日平均44人)(目標入場者数：2,310人)

1930年代はモダンな都市生活が広まる一方で、社会運動が激化し、さらに戦争の足音が近づきつつある時代であり、そうした時代を反映して、メッセージを伝えようとする手法に様々な工夫がなされた時代であった。この展覧会では、当時作成されたポスター、チラシ、パンフレット、雑誌などを通して時代を「踊りだす文字」、「社会生活の標語化」、「グラフィズムの新感覚」、「商品化される市民生活」という4つの視点から探った。

#### 「現代の布」

期間：平成13年9月22日(土)～11月18日(日)(50日間)  
会場：工芸館  
出品点数：67点  
入館者数7,534人(1日平均151人)(目標入場者数：6,600人)

布を作る過程そのものを表現として捉え、その上にいかなる形の創造がなされているか。本展は糸・織る・布というものを表現の技法・素材として捉える14名の作家による約70点の作品を展示し、布による新しい表現の可能性を探る試みとして企画した。

#### 交換展

##### 「京都の工芸 1945 - 2000」

主催：東京国立近代美術館、京都国立近代美術館  
会場：工芸館  
出品点数：291点  
会期：平成13年12月1日(土)～平成14年2月11日(月)(54日間)  
前期：平成13年12月1日(土)～平成14年1月6日(日)  
後期：平成14年1月10日(木)～2月11日(月)

入館者数：9,012人(一日平均167人)(目標入場者数：8,350人)

平成10年に近代京都の工芸の黎明期から揺籃期を展覧した「京都の工芸[1910-1940]」展を行ったが、本展はこれに続き、美術工芸が大きく展開、発展した第2次世界大戦終結後から2000年までの約50年を前回同様、陶芸、染織、漆芸の3分野に着目し、工芸の歴史や新しい動向を検証した展覧会である。平成13年度京都国立近代美術館の企画展として開催し、この後工芸館に巡回したものである。

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」展

期間：平成14年1月16日(水)～3月10日(日)(47日間)

会場：本館

共催：読売新聞社

協賛：日立ハイテクノロジーズ

助成：アサヒビール芸術文化財団 東洋文化財団

出品点数：391点

入場者数：74,058人(1日平均1,576人)(目標入場者数：51,900人)

鑑賞環境の整備とサービス機能の向上をはかる増改築工事のため二年半のあいだ休館した本館が、そのリニューアル・オープンを記念して、21世紀にむけて当館の基本的な指針を示すことを期した展覧会。

激動の世紀と言われる20世紀、美術もまた比類ない変貌を遂げたが、この展覧会に期したものは、20世紀文明のなかにある私たちが、20世紀の美術をどのように受けとめようとするのか、前向きに振り返る機会となること、20世紀の美術を単に過去のものとして、その変遷を跡づけるのではなく、美術を20世紀文明のなかでとらえ直すことから、私たちが引き継ぐものは何かを考える機会を企画したものである。その意味を込めてテーマも「未完の世紀」と謳った。

新装なった美術館の全館を使用して、海外作家の作品を含め、絵画・彫刻・版画・写真・工芸・資料など391点(うち外国作家の作品は93点)を、8章16節に区分けして展示した。20世紀文明への視点をきわだたせた章立ては、大きな推移をたどれるように年代で区切り、各章の間を単線的につなぐことを控え、ひとつの時代の文化的な多面性を示すことに意を注いだ。美術館の見解として、展覧会をより一般的な年代区分からなる8つの時代区分で構成し、ひとつの歴史的なガイドラインを提示しつつも、観客の一人一人が20世紀の歴史と20世紀の美術について、それぞれの視点から読みとれるように、提示することを心がけた。

出品作391点のうち館蔵品は184点、独立行政法人国立美術館内の他の三館から30点、他は国内の国公私立美術館51館と個人所蔵家からの出品による。

会期中に展覧会に因んだ4回の連続講演会と「イヴニング・ギャラリー」と称したギャラリー・ツアーを夜間開館日の毎金曜日に8回開催、それぞれ延べ328人、383人の参加があった。

また、この展覧会に関連して、フィルムセンターでは所蔵映画フィルムによる「フィルムで見る20世紀の日本」と題した企画上映が開催された。

「カンディンスキー展」

期間：平成14年3月26日(火)～5月26日(日)(54日間(うち平成13年度6日間))

会場：本館

共催：NHK、NHKプロモーション

協力：アエロフロート・ロシア航空、フィンランド航空、日本航空

出品点数：約70点

入場者数：6,598人(1日平均1,099人)(目標入場者数：6,000人)

(平成13年度中)

本館常設展

期間：平成14年3月26日(火)～5月26日(日)(54日間(うち平成13年度6日間))

会場：本館

出品点数：321点

入場者数：594人(1日平均99人)(目標入場者数：650人)

(平成13年度中)

工芸館常設展

入場者数13,466人(目標入館者数 27,000人)

ア.「近代工芸の百年」 3回陳列替え

会場：東京国立近代美術館工芸館

会期：平成13年4月10日(火)～5月13日(日)(47日間)

出品点数：120点

入場者数：3,495人(1日平均117人)(目標入場者数：9,666人)

所蔵作品によって近代工芸百年の歴史を示そうとするもの。明治から現在まで、それぞれの時代に活躍した著名な工芸家を取り上げ、陶磁、染織、漆工、金工、ガラス、木竹工など様々な分野の作品を制作年代順に列べることで、我が国の近代工芸の全体的な流れを見渡そうとした。「明治中期から後期(欧米向け輸出工芸)」、「大正時代から昭和戦前期(生活や古典への回帰)」、「昭和戦前期(構成派と民芸)」、「昭和戦後期(伝統工芸の誕生)」、「1960年代から1990年代(個性表現とオブジェ)」、「1960年代から1990年代(クラフトデザインと人形)」という構成で展示した。

イ.「近代の工芸 1991-2000年の新収蔵作品から」

会場：東京国立近代美術館工芸館

会期：平成13年5月22日(火)～7月8日(日)(40日間)

出品点数：459点

入館者数：3,219人(一日平均83人)(目標入場者数：3,324人)

工芸館ではここ10年くらい、近代の流れや現代の動向を示す工芸及びデザインの優れた作品の収蔵に力を入れてきた。本展では、その1991年から2000年の間に収蔵された作品によって、当館の収集の軌跡を示し、併せてそうした近・現代における工芸及びデザインの多様な展開を提示した。新収蔵の作家約200人による作品約230点を選択し、会期を前期と後期に分けて展示した。

ウ.「所蔵作品による近代日本の美術と工芸 暮らしをいろどる」

会場：工芸館

会期：平成13年7月20日(金)～9月9日(日)(45日間)

出品点数：121点

入場者数：6,647人(一日平均148人)(目標入場者数：6,10人)

普段一緒に並べられることの少ない、工芸作品と美術作品を一緒にならべることで、衣食住など日本人の暮らしのもつ豊かさを示すことを試みた。

エ.「近代工芸とデザインの東西」

会場：工芸館  
会期：平成14年2月23日(土)～4月14日(日)(32日間)  
出品点数：143点  
入場者数：5,399人(一日平均169人)(目標入場者数：7,800人)

近代以降、生活様式を西洋化させてきた日本では、工芸とデザインの分野においても「西洋」は多くの作家に何らかの陰影を落としてきた。この展覧会では、とくに西洋の装飾美術、デザイン、工芸と関わりが深く、かつ近代の工芸とデザインの歴史のなかでも、特色のある新しい傾向や運動へと発展した作品を選び、関連する西洋の装飾美術やデザイン作品とあわせて展示した。全体は、1.クリストファー・ドレッサーと明治の輸出工芸、2.アール・ヌーヴォー様式の広がり、3.アール・デコと工芸の「構成派」、4.伝統の見直し、5.ガラスを表現の素材に、6.クラフトとインダストリアル・デザインの6つのテーマから構成された。

## (2) 収蔵品の貸与

計111件、2,607点の作品の貸し出しを行った。

## (3) アンケート調査の実施

つぎのとおり、「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」、「近代工芸とデザインの東西」の展覧会及びギャラリー・トークにおいて、アンケート調査を実施した。

### [展覧会]

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」

結果：展覧会について約8割の肯定的意見があった。

「近代工芸とデザインの東西」

結果：展覧会について約8割の肯定的意見があった。

### [ギャラリー・トーク]

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」

結果：ギャラリー・トークについて約8割の肯定的意見があった。

「近代工芸とデザインの東西」

結果：ギャラリー・トークについて約5割の肯定的意見があった。

## 3 調査研究

### (1) 調査研究の実施及び成果の発表

20世紀美術に関する総合的調査研究

研究者 本館・工芸館の学芸職員全員。

展覧会「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」のカタログに、テキスト、時代区分の章解説、コラムを分担執筆。

市川政憲「20世紀文明と文化のはざまに」同展カタログのテキスト

松本透「戦後美術の同時代性について」同展カタログのテキスト

鈴木勝雄 『現代の眼』532号で同展の特集を編集。

ロシアにあるカンディンスキーの作品に関する調査研究

研究者 中林和雄、鈴木勝雄

中林和雄「カンディンスキー、時代の子」カンディンスキー展カタログのテキスト

鈴木勝雄「カンディンスキーとロシア - 1913年の戦略」同展カタログのテキスト

小倉遊亀に関する調査研究

研究者 尾崎正明、古田亮

調査継続中。平成14年度の展覧会で成果発表。

明治大正期におけるロマンティシズムの水脈の検証  
研究者 市川政憲、蔵屋美香  
継続中。平成14年度の展覧会で成果発表。

海外における近代日本美術の研究成果・態勢の調査並びに内外の共同研究の推進（科学研究費補助金）  
研究代表者 松本透  
報告書作成中。

現代的造形表現としての布の可能性に関する調査研究  
研究者 今井陽子  
「現代の布 - 染と織の造形思考」展カタログのテキストを執筆。  
『現代の眼』530号で特集を編集。  
「今日の染織造形」、大阪芸術大学通信教育教科書『繊維基礎実習』

明治時代の工芸概念の胚胎と変遷に関する研究のための資料調査  
研究者 金子賢治、北村仁美  
金子賢治「海外に渡った明治の染織」『ドレスタディー』40号  
北村仁美「クリストファー・ドレッサーへの視点」『現代の眼』527号

戦後の工芸運動確立期に関する研究  
研究者 金子賢治、諸山正則、今井陽子、木田拓也  
金子賢治「現代陶芸の理論 - 西洋世界と日本」『現代の眼』529号  
諸山正則「漆工品の補修と大場松魚《金銀平文鶴文箱》」『現代の眼』531号  
「河井寛次郎の木彫」千葉市美術館展覧会カタログ  
今井陽子「友禅における染の現代 - 森口華弘の作品をめぐって」『現代の眼』532号  
木田拓也「昭和の桃山復興（三）備前・金重陶陽」『陶説』586号

1930年代日本のポスターに関する調査  
研究者 樋田豊次郎  
「大衆社会におけるデザイン」「1930年代日本の印刷デザイン」展カタログのテキスト。

明治大正期における図案集の研究 - 世紀末デザインの移植とその意味 - （科学研究費補助金）  
研究代表者 樋田豊次郎  
報告書作成中。

展覧会場用映像ソフトについての調査研究（凸版印刷と共同研究）  
研究代表者 尾崎正明

#### 4 教育普及

##### （1）資料収集及びレファレンス機能の充実

本館及び工芸館のアトライブラリについては平成13年度中に合わせて13,497冊の収蔵を図り、平成13年度末現在の総所蔵冊数は69,629冊となった。

平成13年度中に行った資料の交換件数は国内機関との間で265件、国外機関との間で206件であった。

本館の3階会場内に情報コーナーを設置し、レファレンス機能の充実を図った。

##### （2）作品データ等のデータベース化の推進

- ア．当館が所蔵している美術作品（8,854点）についてデータ・画像入力を行い、データベース化を進めた。  
本年度末現在、文字データについては、全収蔵作品、画像データのうち、約7割が入力済みとなった。
- イ．当館が所蔵している工芸作品（2,967点）についてデータ・画像入力を行い、データベース化を進めた。  
本年度末現在、文字データについては、全収蔵作品、画像データのうち、約3割が入力済みとなった。

（3）資料閲覧室等の整備

本館、工芸館とも平成14年度からの閉架式閲覧サービス開始をめざして、閲覧室の開室準備と資料の整理を進めた。

本館については、平成14年1月16日からアトライブラリを開室した。

工芸館についても、建物北側への閲覧室の増設を行い、平成14年度当初の開室を目指して準備中である。

（4）児童生徒に対する教育普及事業の実施

小中学生向け鑑賞教室（常設展「近代日本の美術と工芸」期間中に10回開催）

工芸館において夏休み期間中の水曜日、午前と午後の2回、館員とともに工芸と美術作品を見て回る子供向けのギャラリー・トークを開催。

（5）講演会等の実施

ギャラリー・トーク

作品の理解を援助するとともに、美術館そのものを身近に感じてもらうことをねらいとして、学芸員が直接、観覧者に説明をするギャラリー・トークを実施した。

なお、本館の「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展、工芸館の「現代の布」展については、特別に外部から専門家や作家を招いた。

講演会

本館では「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展について、来館者の理解をより深めてもらうために講演会を開催した。担当学芸員がその意図、内容を解説するとともに、外部の専門家を招いて異なる視点からも展覧会について論じてもらった。

パフォーマンス

「未完の世紀 20世紀美術がのこすもの」展の出品作家・松澤宥は、60年代半ば以後、一貫して言葉（文字と音声）による「観念芸術」を提唱・実践しているが、今回は、あと80年で、大気の組成が生物の生存に適さないものになるという「80年問題」に着想したテキストの提示と朗読によるパフォーマンスを行った。

（6）他機関の研修への協力

大学生の学芸員資格取得のための博物館実習等に協力した。

（7）発行事業の実施

「平成12年度年報」

発行準備中

「東京国立近代美術館概要」

発行済

展覧会、企画上映に伴う図録の発行

「現代の眼」 5回発行済（年度計画 6回発行）

（8）ホームページの活用

ホームページでは美術館の概要、企画展を含む活動一般、所蔵作品に関するデータなどの

情報の公開に努めるほか、職員募集などの事務的な活動にも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。

また、ホームページを新しいレイアウトにするための検討を行い、できるものから順次更新作業を行った。法人化に伴い、法人のホームページを作成し、中期目標、中期計画、年度計画等を公表するとともに当館のホームページとリンクし、積極的に利用の促進を図った。

#### (9) ボランティア・企業との連携等の検討

他の美術館の実践実例等を参考にボランティア制度の導入に向けた検討を行った。

展覧会を開催するにあたり、新聞社、企業、メセナ財団より協力及び支援を得て、企画運営、広報普及、利用者サービス等の充実を図った。

工芸館においては、積極的な普及広報を図るため、雑誌に所蔵品を取り上げた連載を展開した。これにより、広く公衆に対し、近現代工芸及び東京国立近代美術館の活動の周知が図られたと考えている。

#### (10) 美術館施設の整備

平成13年8月に本館の改修を終え、平成14年1月16日「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」展で本館を再開館した。

### 5 その他の入館者サービス

#### (1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

本館では車椅子で利用できるエレベーター2基の増設、車椅子用リフトの設置等により高齢者・身体障害者等に対するバリアフリーに配慮している。

#### (2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

本館では案内情報のためのカウンターを設けるとともに、展示作品のキャプション等文字表示を大きくするなど適切な改善を行った。また本館、工芸館で貸し出し用車椅子、貸し出し用ベビーカーを用意した。

#### (3) 鑑賞環境の充実

展覧会内容に応じ、「会場ガイド」等を無償配布した。

#### (4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

小中学生の常設展入場料の無料化を実施した。なお、共催展であるカンディンスキー展についても小中学生の入場を無料とした。

また、本館は、平成14年1月16日のリニューアル・オープン展「未完の世紀展」から従来の金曜日に加え、木曜日も午後8:00までの開館を実施した。

#### (5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実 [当館の実施状況]

##### [本館]

本館においては今回の改修にあわせレストラン(60席)を開設するとともに、ミュージアムショップを開設した。

1階エントランスホール、4階、3階及び2階に休憩室を設け休憩用椅子を多数配置した。なお、1階エントランスホールは展覧会入場者だけでなく全ての来館者が憩える場所として提供した。

3階ロビーに展示作品等の情報を提供する情報端末機の設置、カタログ等を置く情報コーナーを開設した。

##### [工芸館]

工芸館においては、館全体が狭あいのため、ミュージアムショップ等のスペース確保が難

しいが、館内スペースを活かして、グッズの販売を行い、来館者へのサービスに努めた。

#### 6 職員の研修の実施

本館リニューアル・オープンにあたって、若手事務職員・研究員を対象に、展覧会事業の概要、接遇（特に苦情対応）に関する必要な知識及び技術等を習得させ、美術館職員としての資質等の向上を図ることを目的とした研修を実施した。

新任係長を東京大学係長研修に派遣した外、施設担当職員を文部科学省施設担当職員研修に派遣した。

## - 2 東京国立近代美術館フィルムセンター

### 1 収集・保管

#### (1) 映画フィルム等の収集

当フィルムセンターにおける映画フィルムの収集状況は、平成13年度末現在、日本映画21,387本、外国映画6,833本である。各社の劇映画を中心とした購入を行うとともに、日本映画新社等の文化・記録映画の購入を行った。また、平成8年及び平成10年に調査・確認されたロシア所在の戦前日本映画の購入も前年に引き続き行った。

映画フィルムの寄贈に関しては、日本劇映画についてはこれまでと同様、文化庁優秀映画作品や日本芸術文化振興会で助成された作品の中で、寄贈に応じていただけたものを、文化・記録映画については、社団法人映像文化製作者連盟を通じた呼びかけに応じていただいた、当該連盟加盟の製作会社から何点か原版の寄贈を受け入れた。平成13年度の購入額は112,905,133円であった。

映画関連資料に関しては、フィルムセンター創立以来、映倫管理委員会、東宝東和株式会社、東映株式会社、御園京平氏、竹崎清彦氏などから大量に寄贈を受け、これまでに約42,000点のポスター、約30,000冊のシナリオ等を収集したが、平成13年度は撮影監督の横山実氏の御遺族から117冊の撮影台本の寄贈を受け入れた。

#### (2) 映画フィルムの保存管理

映画フィルムは化学的に脆弱なため、映画フィルム専用の保存庫を備えるフィルムセンター相模原分館において24時間体制で保存している。

#### (3) 収蔵品の修復等

本年度は、ロシアから収集した戦前期の日本映画のうち、8作品について保存用のネガフィルムを作製した。マスターは所蔵しているものの、上映用35mmプリントを作製していなかった文部省作品について、上映企画に合わせてネガおよびプリントを作製し、所蔵作品の有効活用をはかった。

また、諸外国への日本映画紹介のために9本の無声映画について新たに英語字幕付プリントを作製するとともに、平成12年度に購入した中国映画フィルムに日本語字幕を附し、今後の企画上映に備えた。

### 2 公衆への観覧

#### (1) 上映会や展覧会の実施

##### [上映会]

「中国映画史の流れ - 無声後期からトーキーへ」

期間：平成13年4月3日(火)～5月6日(日) 30日間

入館者数6,052人(1回平均101人)(目標入場者数：6,000人)

1920年代の半ばに産業として成立した中国映画は、監督孫瑜(スン・ユイ)らをはじめとする数々の映画人の貢献によって1930年代には上海を中心に花開き、第一期黄金時代と称されるに至った。聯華影片公司、明星影片公司といったプロダクションの精力的な活動により、映画を近代芸術として成立させた「上海映画」は、フィルムセンターの外国映画コレクションの中でも近年重要な位置を占めるようになっている。この企画は、『新女性』(1935年)などの作品を残して夭折した伝説のスター女優阮玲玉(ロアン・リンユイ)、『夜明け』(1933年)や『スポーツの女王』(1934年)で知られる女優黎莉莉(リー・リーリー)「銀幕の皇帝」と呼ばれた二枚目の金焰(チン・イェン)など、キャストの面にも配慮しながら、無声時代後期から1940年代初頭に至る31本の秀作を連続上映したものである。

「日本映画の発見 : 1960年代」(1)

期間：平成13年5月15日(火)～8月5日(日) 144日間  
入館者数28,254人(1回平均196人)(目標入場者数：27,000人)

「日本映画の発見 : 1960年代」(2)

期間：平成13年8月14日(火)～11月4日(日) 72日間  
入館者数27,884人(1回平均194人)(目標入場者数：27,000人)

1996年から継続している長期企画「日本映画の発見」シリーズは、この特集で第期「1960年代」へと歩を進めることになった。日本が高度経済成長を遂げた1960年代は、映画産業にとっては劇的な凋落を体験する時代であり、映画館数は7,000館超から3,000館台へと落ち込み、年間延べ入場者数も10億人超からその4分の1となる2億5000万人台へと激減することになった。「娯楽の王者」の地位を他に譲った映画は、しかし、なおも以前と大きくは変わらない製作本数を維持し、サラリーマン喜劇や特撮・怪獣映画、仁侠・ヤクザ映画といったシリーズ物の「プログラム・ピクチャー」を多数製作することによって、世界映画史にも稀な娯楽映画ジャンルの系譜を生み出していった。また、『紀ノ川』(1966年、中村登監督)や『飢餓海峡』(1964年、内田吐夢監督)のように、かつて黄金時代を築いた巨匠たちが円熟味を見せ、あるいは総決算に踏み出す中で、スクリーンが若者の思想表明や芸術表現の場になったのもこの時期である。大島渚、今村昌平に代表される野心的なフィルム・アーティストの登場、羽仁進、黒木和雄らドキュメンタリーの分野からの新風、そして若松孝二らの新たな視点によって、1960年代はまた一つの絢爛たる映画の時代となっている。そうした10年間の秀作、話題作96本を、1964年までと1965年以降の公開作品(48本ずつ)という2期に分けて紹介した。

「イタリア映画大回顧」

期間：平成13年11月13日(火)～平成14年2月24日(日) 81日間  
入館者数：33,977人(1回平均214人)(目標入場者数：32,000人)

無声時代から今日までアメリカ、フランスと並んでわが国にとって三大映画国ともいうべきイタリアは、多様なジャンルからその豊かな映画史を構成してきた。スペクタクル史劇、艶笑喜劇、メロドラマ、歴史大作、政治映画からマカロニ・ウェスタンにまで及ぶ拡がりを持ち、ソフィア・ローレンやマルチェロ・マストロヤンニに代表される国際スターを生み出しながら時代ごとに華やかな魅力を振りまいてきた。同時に、敗戦後の荒廃したイタリア社会を見つめた「ネオレアリズモ」は、ロッセリーニ、デ・シーカ、フェリーニ、ヴィスコンティといった個性的な映画作家を輩出し、戦後の世界映画史を牽引する原動力にもなっている。この特集は、そうしたイタリア映画の連続上映企画として、わが国の歴史上、最長最大のもので、1910年代から80年代に至る55本の作品からなる本企画(共催：朝日新聞社、チネテーカ・ナチオナーレ)は、うち53本がイタリアから提供を受けたものである。なお、企画の初期(11月17日)にはチネテーカ・ナチオナーレ副館長セルジョ・トフェッティ氏の、締めくくり(2月24日)には同館長アドリアーノ・アブラ氏の講演会を実施し、本企画のコンセプトを明らかにしていただいた。また無声映画の上映にイタリアを代表する伴奏ピアニスト(アントニオ・コッポラ、ステファノー・マッカーニョの両氏)の創造的な演奏を付したことも、イタリア無声映画の豊穡さを際立たせ、高い評価を得た。

「フィルムで見る20世紀の日本」

期間：平成14年3月5日(火)～3月24日(日) 18日間  
入場者数：3,719人(1回平均103人)(目標入場者数：3,500人)

当館本館のリニューアル記念展「未完の世紀 - 20世紀美術がのこすもの」の関連企画

として開催された本企画は、コレクションの重要な部分をなす日本の記録映像に照準を当てながら、激しい変化を体験した日本の政治、社会、文化を18の切り口を軸に俯瞰する試みである。映画史の文脈をいったん離れ、映画カメラが各時代に捉えてきた大小さまざまな出来事、人物、風物などを主題別に並びかえて18の番組に組み全体で99本の短篇(文化・記録映画、ニュース映画)を上映した。プログラムの構成にあたっては、関東大震災(『関東大震災火災実況』など)や太平洋戦争での占領地(『大東亜ニュース』など)といった、いわば「大文字で書かれた歴史」の記憶をなすテーマばかりでなく、産業や運輸、さらには暮らしや衛生生活、教育といった人々の日常的な営みに由来するテーマにも注意を払い、少数民族や女性の地位といった視点にも配慮した。

#### [ 展覧会 ]

「イタリア映画ポスター展」

期間：平成13年11月17日(土)～平成14年2月24日(日)(77日間)

会場：7階展示室

出品点数：140点

入場者数：4,320人(1日平均46人)(目標入場者数：3,850人)

上映企画「イタリア映画大回顧」の開催にあわせ、7階展示室では所蔵品によるイタリア映画ポスター展を開催した。

「資料でみる日本映画史 - みそのコレクションより - 」

期間：平成14年3月5日(火)～3月24日(日)(18日間)

／4月2日(月)～5月26日(日)

会場：7階展示室

出品点数：約1,000点

入場者数：1,307人(1日平均73人)(平成13年度中目標入場者数：500人)

御園京平(本名・月村吉治)氏が生涯をかけて収集した膨大な映画資料は、とくにポスター、スチル写真、プログラム(チラシ、パンフレット)の三分野で他を圧倒する質と量を誇り、「みそのコレクション」の通称で広く知られている。

このうち、ポスター類は1995年の新館オープンを機にフィルムセンターに寄贈され、我が国の映画史をひもとく貴重な文化遺産となっているもので、当展示室でも映画生誕百年を記念した「ポスターでみる日本映画史」以来、さまざまな展示で活用している。本展は同氏の死後、遺族から当センターに寄贈されたスチル写真、プログラムのコレクションを加えた1,000点近い「みそのコレクション」により、我が国の日本映画史をたどろうとするものである。

#### (2) 優秀映画鑑賞推進事業の実施

平成13年7月4日(水)から平成14年2月24日(日)まで

都道府県数：44都道府県 / 会場数：154会場 / 入場者数計：72,943人

「優秀映画鑑賞推進事業」は、文化庁とフィルムセンターが日本映画製作者連盟、全国興行環境衛生同業組合連合会などの協力のもと、全国各地の公立文化施設などと共同して、優れた日本映画の良質な35mmプリントを提供する巡回上映事業のプログラムである。今年度の上映作品は4作品を1プログラムとし、20プログラムでの実施となっている。

#### (3) 映画文化に関する国際交流事業の実施

本事業は、広く世界の人々に日本映画を紹介し、映画芸術の向上と発展に資するために、海外で開催される国際映画祭のコンペティション部門に選定された日本映画を出品する事業である。作品には外国語字幕を付され、最初に招待されたコンペティション部門にお

いて上映される。作品は、その後2年間、各地で開かれる国際映画祭にも出品されることとなっている。

平成13年度は、あわせて10作品を出品した。「いちばん美しい夏」は、上記映画祭のアジア映画を対象とするNETPAC賞において優秀作(スペシャルメンション)と認められた他、ハワイ国際映画祭最優秀作品賞、マンハイム・ハイデルベルグ国際映画祭国際批評家(FIPRESCI)審査特別賞を受賞した。また、「害虫」は、上記映画祭に出品された後、ナント三大陸国際映画祭(フランス)審査員特別賞を受賞した。「かあちゃん」の市川崑監督は、上記映画祭においてライフ・アチーブメント・アワード(功労賞)を受賞した。

#### (4) 収蔵品の貸与

計14件、84点の映画フィルムの貸出しを行った。

#### (5) アンケート調査の実施

次のとおり「フィルムで見る20世紀の日本」の上映会開催中において、アンケート調査を実施した。

「フィルムで見る20世紀の日本」

結果：展覧会について約9割の肯定的意見があった。

### 3 調査研究

#### (1) 客員研究員の招聘

3名を招聘し、次の活動を行った。

所蔵映画フィルムの総合的なデータ分析とカタログ及び目録作成

所蔵映画関連資料に関するデータ構築と総合的な研究調査及び書誌作成

所蔵映画フィルムの科学的側面からの保存・復元研究

映画保存に関する国内外文献の比較調査研究

外国映画に関する事業・企画の共同研究

#### (2) 調査研究の成果の発表等

中国映画史に関する調査研究

研究者 大場正敏

- ・「中国映画史の流れ」開催にあたって『NFC ニュースレター』第36号(2001年4-5月号)

記録映画に関する調査研究

研究者 入江良郎、岡田秀則

- ・三人の女性監督、それぞれの記録映画史(聞き手、構成)『NFC ニュースレター』第36号(2001年4-5月号)

研究者 岡田秀則

- ・いまだ見ぬ「20世紀」への長くて短い旅『NFC ニュースレター』第41号(2002年2-3月号)

映画保存等に関する調査研究

研究者 岡島尚志

- ・映画保存の二つの課題：ピネガー・シンドロームとデジタル復元について『NFC ニュースレター』第37号(2001年6-7月号)

- ・FIAF ラバト会議報告 フィルム・アーカイヴと“植民地映画”の関係を中心に『NFC ニュースレター』第38号(2001年8-9月号)

研究者 入江良郎

- ・ドイツの映画保存 ドイツ映画博物館/ドイツ映画研究所(DIF)『NFC ニュースレタ

ー』第40号(2001年12月-2002年1月号)

・ドイツの映画保存 デュッセルドルフ映画博物館『NFCニューズレター』第41号(2002年2-3月号)

研究者 岡田秀則

・ベルギー王立シネマテークの現在『NFCニューズレター』第37号(2001年6-7月号)

・砂丘と木立：オランダの映画保存の現在『NFCニューズレター』第38号(2001年8-9月号)

研究者 常石史子

・第20回ポルデノーネ無声映画祭報告『NFCニューズレター』第40号(2001年12-2002年1月号)

1960年代日本映画に関する調査研究

研究者 佐伯知紀

・日本映画史のなかの1965年：「その他」の登場と撮影所映画への一視点『NFCニューズレター』第39号(2001年10-11月号)

研究者 岡田秀則

・日本映画の「不況スパイラル」：数字で見る1960年代日本映画『NFCニューズレター』第39号(2001年10-11月号)

イタリア映画に関する調査研究

研究者 岡島尚志

・「イタリア映画大回顧」の意味するもの：フィルム・アーカイブの保存と上映という視点から『「イタリア映画大回顧」カタログ』

・吉村信次郎氏に聞く：戦後イタリア映画はいかにして輸入されたか『「イタリア映画大回顧」カタログ』

研究者 岡田秀則

・吉村信次郎氏に聞く 戦後イタリア映画はいかにして輸入されたか『「イタリア映画大回顧」カタログ』

研究者 入江良郎

・ポスターでたどるイタリア映画と日本『NFCニューズレター』第40号(2001年12-2002年1月号)

映画技術に関する調査研究

研究者 常石史子

・シネマスコープの時代(上)：草創期『NFCニューズレター』第38号(2001年8-9月号)

・シネマスコープの時代(下)：作り手の眼 キャメラマン高村倉太郎氏インタビュー『NFCニューズレター』第39号(2001年10-11月号)

海外の日本映画の所在調査(文部科学省科学研究費補助金)

研究代表者 大場正敏

・海外に残存する戦前の日本映画に関する調査研究報告書

#### 4 教育普及

##### (1) 資料収集及びレファレンス機能の充実

フィルムセンターが所蔵する映画関係和書・洋書約20,000冊について閉架式閲覧サービスを行った外、コピーサービスを実施した。また新刊図書等の収集と開架で閲覧できるスペースの整備を行った。

##### (2) 講演会の実施

## 「イタリア映画大回顧」上映に因む講演会 2 回

### ( 3 ) 専門家養成講座の開催

「映画製作専門家養成講座」を実施した。

この講座は、映画、テレビ、ビデオ製作など、映像製作の諸分野で助手等の現場経験を有する人や映画・映像に関する専門学校などで実習経験を有する人を対象とするもので、日本映画の優れた伝統を継承し、次世代の映画製作現場を担うことのできる豊かな人材を育成することを目的としている。

### ( 4 ) 発行事業の実施

展覧会、企画上映に伴う図録の発行

「NFCニューズレター」 6回発行済 (年度計画 6回発行)

「NFCカレンダー」 5企画すべてで発行 (年度計画 企画毎発行)

### ( 5 ) ホームページの活用

ホームページではフィルムセンターの概要、企画上映を含む活動一般などの情報の公開に努めるほか、職員募集などの事務的な活動にも積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。

また、ホームページを新しいレイアウトにするための検討を行い、できるものから順次更新作業を行った。

## 5 その他の入館者サービス

### ( 1 ) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

フィルムセンターでは、車椅子で利用できるエレベーターの設置等により高齢者・身体障害者等に対するバリアフリーに配慮している。

### ( 2 ) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

1階受付カウンターで館内の案内情報の提供を行っている。

1階受付に車椅子を常備している。

1階、2階、4階及び7階の来館者が利用できるフロアにパンフレット台を設置し、上映プログラムや展覧会等のチラシを配布している。

### ( 3 ) 鑑賞環境の充実

展覧会の内容に応じ、「出品リスト」を無償配布した。

平成13年4月8日から日曜日開館を実施した。

### ( 4 ) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実

レストランは火曜日から金曜日は午前10時30分から午後8時30分、土曜日及び日曜日は午前10時30分から午後6時まで営業し、入館者へのサービスに努めた。

## 6 職員の研修の実施

本館リニューアル・オープンにあたって実施された研修に職員を参加させた。

## - 3 京都国立近代美術館

### 1 収集・保管

#### (1) 美術作品等の購入

常設展示を体系的かつ美術史上のエポックを画する作品により印象的にするため、収蔵品の欠落部分を補い充実させるという基本方針に基づき、美術作品購入等選考委員会及び評価委員会の審議の下、平成13年5月21日(月)に第1回委員会を、平成14年3月11日(月)に第2回委員会をそれぞれ開催して、鈴木治《雪の中の馬》他34点を232,840,000円で購入した。また、寄贈作品についても同様の手続きにより、当館の所蔵作品にふさわしい作品と認められたものについて受贈した。

#### (2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

寄贈・寄託品は、当館の常設展示及び他館等への貸出しによって積極的に活用している。

常設展については年間10回の陳列替えを行って作品の公開に努めているが、平成13年度に公開した作品は延772点にのぼる。これを収蔵経緯別にみると購入作品が62%、寄贈作品が31%、寄託作品が7%となり、寄贈・寄託品の有効活用は数字の上からも明らかである。

また、作品貸出しについては、年間632点にのぼる。これを収蔵経緯別にみると購入作品48%、寄贈作品48%、寄託作品4%となり、常設展同様、寄贈・寄託作品は有効に活用されている。

以上のことから明らかなように、収蔵品が十分でない当館においては、寄贈・寄託を積極的に受けることでその欠を補っている。

#### (3) 作品の保存管理

会場内では、作品を安全に展示するために年間を通じて館内10数箇所での温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施し、必要に応じた改善の実施を行っている。

また、収蔵庫においては、収蔵作品に応じて各室毎に温度・湿度を変え、温度・湿度のデータの管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。

#### (4) 収蔵品修復

緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから分野ごとに計画的に修復を行った。

### 2 公衆への観覧

#### (1) 展覧会の実施

##### 展覧会

##### ア「ルネ・ラリック 1860-1945」

期間：平成13年2月10日(土)～4月15日(日)(56日間(うち平成13年度13日間))

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数：407点

入場者数：68,958人(1日平均1,231人)(目標入場者数：80,000人)  
(うち平成13年度中は30,818人(1日平均2,371人)(目標入場者数：19,000人))

共催者：日本経済新聞社、NHKきんきメディアプラン

イ「前田青邨展」

期間：平成13年4月24日(火)～6月3日(日)(37日間)

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数：97点(前後期計)

入場者数：27,473人(1日平均743人)(目標入場者数：30,000人)

共催者：日本経済新聞社

ウ「ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開」

期間：平成13年6月19日(火)～8月12日(日)(48日間)

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数：68点

入場者数：16,595人(1日平均346人)(目標入場者数：10,000人)

エ「京都の工芸 - 1945～2000」

期間：平成13年8月28日(火)～10月21日(日)(48日間)

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場、4階常設展示場の一部

出品点数：291点

入場者数：10,797人(1日平均225人)(目標入場者数：20,000人)

共催者：東京国立近代美術館

オ「オーストリア・デザインの現在 - 広がるデザインの世界」

期間：平成13年9月11日(火)～10月14日(日)(30日間)

会場：京都国立近代美術館1階展示ロビー

出品点数：32点

入場者数：4,660人(1日平均155人)(目標入場者数：5,000人)

カ「小松均展」

期間：平成13年10月30日(火)～12月16日(日)(42日間)

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場、4階常設展示場の一部

出品点数：58点(前後期計)

共催者：読売新聞社

(期間変更)

当計画策定後終期を12月9日(日)(36日間)に変更

入場者数：16,937人(1日平均470人)(目標入場者数：30,000人)

キ「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

期間：平成13年12月22日(土)～平成14年2月11日(月・祝)(38日間)

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数：101点

入場者数：27,749人(1日平均730人)(目標入場者数：40,000人)  
(追加実施)

「銅版画の巨匠 長谷川潔展」

期間：平成14年2月21日(木)～4月7日(日)(40日間(うち平成13年度34日間))

会場：京都国立近代美術館3階企画展示場

出品点数：197点

入場者数：8,807人(1日平均220人)(目標入場者数：9,000人)

(うち平成13年度中は6,737人(1日平均198人)(目標入場者数：8,000人))

ク 常設展「近代の美術・工芸・写真」 10回陳列替え

入場者数：133,254人

(目標入場者数：12万人)

国立博物館・美術館巡回展

ア「かざりとかたち」

共催者：独立行政法人国立博物館(京都国立博物館)

1)期間：平成13年10月6日(土)～平成13年11月4日(日)(32日間)

会場：鹿児島県歴史資料センター黎明館

入場者数：5,725人

2)期間：平成13年11月13日(火)～平成13年12月12日(水)(27日間)

会場：沖縄県立博物館

入場者数：6,927人

(2) 収蔵品の貸与

632点 98件の収蔵品等を貸出。

(国内 621点 94件、 海外 11点 4件)

[平成13年度展覧会協力等]

「河井寛次郎の世界 - 熱情の陶匠」

会期：平成14年1月26日(土)～3月10日(日)(38日間)

会場：茨城県陶芸美術館

主催：茨城県陶芸美術館

後援：京都国立近代美術館、NHK水戸放送局

(3) アンケート調査の実施

「前田青邨展」, 「ミニマル マキシマル ミニマル・アートとその展開」, 「京都の工芸 - 1945～2000」, 「オーストリアの現代デザイン」, 「小松均展」, 「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」, 「銅版画の巨匠 長谷川潔展」の各展覧会・講演会等においてアンケートを実施した。

[ 展覧会 ]

「前田青邨展」

展覧会について約 9 割の肯定的意見があった。

「ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開」

展覧会について約 9 割の肯定的意見があった。

「京都の工芸 - 1945 ~ 2000」

展覧会について約 8 割の肯定的意見があった。

「オーストリア・デザインの現在 - 広がるデザインの世界」

展覧会について約 8 割の肯定的意見があった。

「小松均展」

展覧会について約 10 割の肯定的意見があった。

「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

展覧会について約 9 割の肯定的意見があった。

「銅版画の巨匠 長谷川潔展」

展覧会について約 9 割の肯定的意見があった。

「常設展」のみの開催期間

展覧会について約 8 割の肯定的意見があった。

[ 講演会 ]

「ミニマル マキシマル - ミニマル・アートとその展開」

ア「ミニマル・アートその基本概念と影響力」

講演会について約 10 割の肯定的意見があった。

イ「ドイツでの作家活動について」

講演会について約 8 割の肯定的意見があった。

ウ「ミニマル・アートとは何か」

講演会について約 10 割の肯定的意見があった。

「京都の工芸 - 1945 ~ 2000」

ア「戦後工芸の京風美意識」

講演会について 10 割の肯定的意見があった。

イ「京都の工芸 - 1945 ~ 2000」

講演会について約 6 割の肯定的意見があった。

「小松均展」

ア「小松均の人と芸術」

講演会について約 7 割の肯定的意見があった。

「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

ア「シエナ美術とその魅力」

講演会について約 8 割の肯定的意見があった。

「銅版画の巨匠 長谷川潔展」

ア「長谷川潔の人と芸術」

講演会について約 9 割の肯定的意見があった。

[ 音楽会 ]

「シエナ美術展 - 絵画・彫刻・工芸の精華 - 」

ア「エレクトーン・タイムカプセルコンサート 時空を超えて～音楽で旅するイタリア」

講演会について約10割の肯定的意見があった。

[ シンポジウム ]

「オーストリア・デザインの現在 - 広がるデザインの世界」

ア「オーストリア・デザイン - パパネックの遺産と現在」

講演会について約9割の肯定的意見があった。

3 調査研究

( 1 ) 調査研究の実施

近代京都の工芸に関する調査研究

研究担当者：松原龍一（主任研究官）

執筆書誌：「京都の工芸」展図録として成果発表

「京都の工芸 1954-2000」松原龍一

ドイツ工作連盟に関する調査研究

研究担当者：池田祐子（主任研究官）

計画どおり次年度も継続実施

[ 研究助成 ]

・財団法人サントリー文化財団平成12年度「人文科学、社会科学に関する研究助成」

・「ヘルマン・ムテジウス日本滞在中書簡草稿の調査・研究 - 近代建築・デザインの源泉をめぐる一考察」平成12年8月 - 平成13年7月

・文部科学省学芸員等在外派遣研修

「ドイツ近代デザイン研究 - ドイツ工作連盟を中心に - 」

平成14年3月9日 - 3月31日

前田青邨に関する調査研究（愛媛県立美術館等との共同研究）

研究担当者：島田康寛（学芸課長） 小倉実子（研究員）

執筆書誌：「前田青邨展」図録として成果発表

「前田青邨の人と芸術」島田康寛

「作品解説」「前田青邨印譜」「主要作品の落款印章」小倉実子

「新美術新聞」926号 「展覧会解説」小倉実子

「文化庁月報」391号 「イベント案内」小倉実子

小松均の総合的研究（宮城県立美術館等との共同研究）

研究担当者：島田康寛（学芸課長） 小倉実子（研究員）

執筆書誌：「小松均展」図録として成果発表

「小松均の遠い道程 - 己の墨画を求めて - 」島田康寛

「年譜」「主要参考文献」小倉実子

「文化庁月報」397号 「イベント案内」小倉実子

神坂雪佳の総合的研究（アメリカ・バーミンガム美術館との共同研究）

研究担当者：島田康寛（学芸課長） 池田祐子（主任研究官）

計画どおり次年度も継続実施

[ 研究助成 ]

・財団法人サントリー文化財団平成 13 年度「人文科学、社会科学に関する研究助成」

「神坂雪佳の総合研究 - 琳派の後継者そして近代デザインの先駆者」

平成 13 年 8 月 - 平成 14 年 7 月

アメリカの現代陶芸に関する調査研究（愛知県陶磁資料館等との共同研究）

研究担当者：松原龍一（主任研究官）

計画どおり次年度も継続実施

海外所在の近代日本美術品についての所蔵美術館との調査研究

研究担当者 内山武夫（館長）

計画どおり次年度も継続実施

他の美術館等における調査研究に対する協力

1) 研究担当者 河本信治（主任研究官）

執筆書誌：「横浜トリエンナーレ 2001 展」図録として成果発表

「横浜プロジェクト：そして、ポジションについて」河本信治

2) 研究担当者：山野英嗣（主任研究官）

執筆書誌：「かざりとかたち展」図録として成果発表

「近代絵画における『装飾』性再考」山野英嗣

（追加実施）

ミニマル・アートについての調査研究

研究担当者 尾崎信一郎（主任研究官）

ポラ美術振興財団平成 12 年度研究助成

「1960 年代以降の日本とアメリカにおける非実体的な美術活動に関する研究」

執筆書誌：「ミニマル マキシマル」展図録として成果発表

「ミニマル・アートあるいは帰還不能点」尾崎信一郎

#### 4 教育普及

（1）資料収集及びレファレンス機能の充実

ア．外国との交換件数 7 件

イ．4 階フリースペースに展覧会・所蔵品図録等のコーナーを設置し、レファレンス機能の充実を図った。

（2）作品データ等のデータベース化の推進

13 年度当初における所蔵品約 6,600 点のうちこれまでに約 3,000 点の文字データ及び約 2,850 点の画像データのデータベース化を実施した。ただし、著作権の存続している作品が多数を占めるため外部への公開については、適切に対処していく。

( 3 ) 資料閲覧室等の整備

近年開催の当館展覧会図録等の閲覧コーナーを4階に設置。また、1階においても他館の展覧会情報等を提供。

( 4 ) 児童生徒に対する教育普及事業の実施

京都市立小学校教諭グループと協力し小学1年生から6年生を対象とするワークショップを実施。

上記計画に掲げたワークショップ以外に、京都市教育委員会、京都市立中学校と連携し、中学生を受入れ、美術館業務を体験させることにより、美術への関心を深め、社会の主体としての自覚を育成することとして事業「生き方探求・チャレンジ体験」を実施。

( 5 ) 講演会等の実施

講演会等参加者(当館主催実施分)

講演会	753名
音楽会	231名
シンポジウム	62名
総数	1,046名
(平成12年度 766名)	

国立博物館・美術館巡回展 講演会

ア 平成13年10月13日(土)

「かざりとかたち」展

( 6 ) 他機関の研修への協力

美術館関係者を対象とした研修事業の実施

上級キュレーター研修を実施し、公立美術館関係者2名を受入れた。

他の機関が実施する研修への協力

大学生を対象に学芸員資格取得のための「博物館実習」に係る学生を受入れ実習を行った。

( 7 ) 「年報」等の発行事業等

「平成12年度年報」

平成14年3月発行

「京都国立近代美術館概要」

平成13年6月発行

展覧会に伴う図録の発行

美術館ニュース「視る」 6回発行

収蔵品目録 『京都国立近代美術館所蔵名品集 [日本画]』

展覧会カレンダー 3回(種)発行

「京都国立近代美術館案内リーフレット」

( 8 ) ホームページの活用

当館のホームページ(平成8年度開設)においては、館の概要、展覧会情報、常設展示目録、年報、ミュージアムショップや喫茶室の情報などを広く館外へ発信した。

( 9 ) ボランティア・企業との連携等の検討

「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を主催する京都市教育委員会等と連携し、ボランティア受入れについて、検討をはじめた。

5 その他の入館者サービス

( 1 ) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

・盲導犬、介助犬を同伴できる施設の整備。

( 2 ) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

- ・館内案内リーフレットに車椅子使用者用トイレを表示。
- ・障害者のための施設利用案内ホームページ(平成13年10月1日開設「人にやさしいまちづくりホームページ」京都府福祉まちづくり推進協議会)に当館利用のための案内ページを掲載。
- ・貸し出し用ベビーカー(2台)を用意。
- ・視覚障害者の美術鑑賞支援として、展覧会出品作品の解説及び「手で触れる」鑑賞体験の介添え。

( 3 ) 鑑賞環境の充実

- ・「ルネ・ラリック展」において、音声ガイドを用意。
- ・常設展示の作品リスト(日本語・英語版)の無料配布。
- ・企画展示(長谷川潔展)の作品リスト(日本語・英語版)の無料配布。

( 4 ) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

平成14年2月21日(木)より、小中学生の常設展入場料を無料とし、かつ同日から開催された「銅版画の巨匠 長谷川潔展」(当館単独主催)についても同様に無料とした。

開館については午前9時30分から午後5時までであったが、4月19日から10月19日までの毎週金曜日を午後8時まで時間を延長して開館した。

( 5 ) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実を図る

- ・1階エントランスホール、4階ロビーに休憩用椅子を多数配置し、展覧会入場者だけでなく全ての来館者が憩える場所として提供。
- ・1階エントランスホール、4階ロビーに館内案内展示作品等の情報を提供する情報端末機を設置。また、1階エントランスホールには他館の展覧会情報を提供するコーナーを、4階ロビーには図録等を閲覧できる情報コーナーを設置。
- ・1Fエントランスホールで展覧会にちなんだ音楽会を企画、開催。

## 6 職員の研修の実施

### (1) 職員の研修の実施

全職員等を対象に接遇研修を実施した。

[ 派遣・参加状況 ]

ア 人事院研修への派遣

イ 文部科学省学芸員等在外派遣研究員としての派遣

ウ 文部科学省研修への派遣

エ 財団法人日本博物館協会の近畿支部長館として、近畿地区の各館園約190館のとりまとめを行うとともに所属館園が参加の支部外地域での研修会を企画・実施

オ 特定非営利活動法人が実施する研究発表会への派遣

カ 京都市内博物館施設連絡協議会が実施する研修会への派遣

## - 4 国立西洋美術館

### 1. 収集・保管

#### (1) 美術作品等の購入

中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可能となるよう、基本的収集方針に基づき、美術作品購入選考委員会及び評価員による審議のもと、美術作品27点を297,531,183円で購入。コレクションの強化を図った。

#### (2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

寄贈作品については、旧松方コレクションなど、当館の収蔵品にふさわしい作品16点について寄贈受入を行った。今後も美術作品の寄贈・寄託の受入を推進し、展示の充実、研究資料として積極的な活用を図っていく。

#### (3) 作品の保存管理

国立西洋美術館では、会場内、収蔵庫ともに24時間空調を実施している。

会場内では作品を良好な状態で展示するため、館内数十個所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施、必要に応じた改善を行っている。また、収蔵庫の温度・湿度のデータ管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。

今年度、本館展示室入口等に風除扉を新設し、より一層の展示室内の温湿度安定を図った。なお、この新設工事に伴う空気汚染調査も併せて実施した。

#### (4) 収蔵品の修復

緊急性の高いものを優先して美術作品の保存修復処置及び、修復処置に伴う作品に用いられた材料の科学分析を行った。また、収蔵品の計画的修復実施に向けて、修復計画作成、点検調書ファイル更新、保存修復設備等の整備を図った。

#### (5) 国内外に対する修復保存に関する寄与

他機関との情報交換の円滑化、当館に寄せられる修復・保存上の助言要請への対応、研修会等への研究員の派遣を積極的に行い、国内外への修復保存に関する寄与を図っている。

平成13年度、当館の主任研究官を欧米の美術館等研究機関に派遣し、最新の保存修復技術及び、保存修復技術者研修制度と養成科目等についての調査を行った。

全国美術館会議学芸員研修会「鑄造彫刻作品の収蔵・展示と鑄造管理の望ましい在り方について」(愛知県美術館)へ研究員2名を派遣し、管理技術の向上、防災対策についての研究交流・情報交換及び、推進・充実を図った。

平成13年7月に、長崎県教育委員会の「美術作品の保存修復を通して美術の真髄に触れ、文化財保護を学ぶ」というテーマによる指導力向上のための派遣研修に協力し、長崎県立高校の美術教諭1名に対して10日間の研修を行った。

平成13年3月に、イタリア学術会議電磁波研究所から外国人研究員2名を招聘して「光

ファイバーを用いた反射スペクトルと Imaging Spectroscopy による非破壊調査法」講演会を開催し、関係者による研究交流・情報交換を図った。

## 2. 公衆への観覧

### (1) 展覧会の実施

「日伊二国間交流展 イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化展」

期間：平成13年3月20日(火)～7月8日(日)(86日間)

(3月20日からの総開催日数97日間)

会場：国立西洋美術館(企画展示館)

出品点数：178点

入場者数：375,643人(1日平均4,368人)(目標入場者数：360,000人)

(3月20日からの総入館者数422,721人)

共催者：日本経済新聞社

協賛・協力：EPSON、キリンビール、資生堂、大日本印刷、東レ、野村証券、山之内製薬、安田火災海上保険、アリタリア航空、JR東日本、日本通運

「日本におけるイタリア2001年」のオープニングを飾る本展は、イタリア政府の全面的協力のもと、イタリア全土60を越える美術館から優れた作品を集めたかつてない規模と内容の「ルネサンス文化」の展覧会となった。本展のテーマは「宮廷と都市の文化」。15世紀から16世紀にかけてのイタリアで花開いた多彩な芸術的革新は、フィレンツェを筆頭にヴェネツィアやミラノなどの諸都市で競い合うようにして展開され、芸術家や工芸職人はそれぞれの都市で宮廷や大規模建築を飾る作品を求めた権力者たちに擁護され、創作に腕をふるった。こうした都市の集合体としてのルネサンス文化を、歴史を縦軸に、都市を横軸に紹介した展覧会である。

「国立西洋美術館所蔵フランス素描名作展」

期間：平成13年3月27日(火)～6月24日(日)(73日間)

(3月27日からの総開催日数78日間)

会場：国立西洋美術館(新館第3展示室、常設展と併設)

出品点数：37点

国立西洋美術館所蔵の素描は、絵画や彫刻と同様に松方コレクションが基盤となっている。その中からドラクロワやセザンヌ、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ、ロダン、シニャック等の作品と、梅原龍三郎氏寄贈のドガ「背中を拭く女」や、77年度購入のロココ時代の女流画家ブリアール「自画像」、84年度購入作品のゴーガン「ラ・マルティニック島の情景」、95年度購入作品のモロー「聖なる象」、そして、20世紀の作家からはマティスやピカソなどの作品を展示した展覧会である。

「日米二国間交流展 アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒ

### ロイズム」

期間：平成13年8月7日(火)～10月14日(日)(60日間)

会場：国立西洋美術館(企画展示館)

出品点数：118点

(肖像が語るアメリカ史展 75点 / アメリカン・ヒロイズム展 43点)

入場者数：44,020人(1日平均734人)(目標入場者数：40,000人)

共催者：文化庁、読売新聞社、西洋美術振興財団

協賛・協力：財団法人東芝国際交流財団、日本航空、日米文化教育交流会議

### CULCON

この展覧会は、1995年に行われた日米首脳会談での合意に基づき、両国間の文化交流のさらなる促進を目指して、ふたつの展覧会の同時開催というかたちで行われた。「肖像が語るアメリカ史」は、ワシントンにあるナショナル・ポートレート・ギャラリーの所蔵作品からなるもので、単に「有名な famous」アメリカ人の肖像から構成されているのではなく、「注目に値する notable」人々に焦点を当てて組織された。「アメリカン・ヒロイズム」は、全米各地の美術館、歴史博物館から作品を借用し、より概念的な英雄崇拜、英雄主義の問題を美術によって探求するものであった。アメリカ独立革命、西部の開拓、自由を求める逃亡奴隷など、アメリカの歴史が視覚的表象のなかで表現されていった系譜をたどり、また、英雄性をより広い概念として捉え、人知を越えた崇高なものとして描かれた風景、技術革新の成果としての摩天楼、20世紀消費社会における欲望の対象としての大衆的英雄(スポーツ選手や歌手)などをも扱った。

### 「子供から楽しめる美術展～水の誘い」

期間：平成13年9月14日(火)～11月4日(日)(55日間)

会場：国立西洋美術館(新館第3展示室他)

出品点数：33点

協力：大日本印刷

美術作品をより身近に、楽しく鑑賞するための「水」をテーマとした展覧会。水には、透明、混濁、反射、形や動き(波、雨、渦)などの様々な表情があり、作家はそうした多彩な表情に刺激され、それらを様々な形で表現してきた。この展覧会では油彩画、版画、ガラス器、衣服などに表された水の表現のヴァリエーションを紹介し、更に、展示に関連した創作・体験プログラム、講演会、コンサートを行った。

### 「デジタル技術とミュージアム」

期間：平成13年11月3日(火)～12月2日(日)(18日間)

会場：国立西洋美術館(企画展示室ロビー、常設展と併設)

特別協力：凸版印刷

本来、ミュージアムは作品や標本などのオリジナルを収集・整理し、研究・保存し、展示する機関であり、その種類は美術作品を扱う美術館から各種博物館、動物園・水族館まで多様である。さらに地図や設計図、各種のスケッチなど画像資料という点では、図書館や各種の資料館、文書館も同様の資料を所蔵している。しかし近年では「電子図書館」「電子博物館」といった館種を越えた情報利用が盛んに論じられている。そこにはデジタル時代ならではの大きな可能性が含まれている。本企画では、当館における試みを含む国内外の20余のシステムやプロジェクトを集め、主として画像のデジタル化、蓄積、表示技術を中心として、その多様性の一端を各種ディスプレイやパネル、また関連機器、大型印刷物等で紹介した。また、それらが「複製」の歴史のなかでどういう位置を占め、ミュージアムの将来にどのような影響を及ぼしていくのかについてのシンポジウムやセミナーを行った。

#### 「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光展」

期間：平成14年3月5日（火）～6月16日（日）（24日間）

（6月16日までの総開催日数91日間）

会場：国立西洋美術館（企画展示館）

出品点数：77点

入場者数：120,749人（1日平均5,032人）（目標入場者数：70,000人）

（3月5日から3月31日までの入館者数）

共催者：読売新聞社

協賛・協力：清水建設、トヨタ、KDDI、JR東海、JR西日本、東レ、JR東日本、日本航空、日本通運

ハプスブルクとブルボンの二つのスペイン王朝の宮廷は、ヨーロッパ各地の優れた画家たちに活躍の場を与え、さらに作品収集活動に情熱を注いだ。宮廷は多様な美術の潮流が交わる国際的な場であり、その流れを促進する大きな力ともなっていた。5点のベラスケス、6点のゴヤをはじめとする77点からなる本展は、プラド美術館のコレクションを紹介しつつ、スペイン美術の流れを、王室コレクションとの関わりを通じて辿ってみたものである。

#### 常設展「中世末期から20世紀初頭にかけての西洋絵画とフランス近代彫刻」

期間：平成13年4月1日（日）～14年3月31日（日）（285日間）

会場：国立西洋美術館（本館、新館）

出品点数：約200点

入場者数：259,917人（1日平均912人）（目標入場者数：250,000人）

フランスの建築家ル・コルビュジェが設計した本館では、18世紀以前に活躍した芸術家の絵画・彫刻作品が展示され、キリスト教を主題とした多くの宗教画を見ることができる。新館では、19世紀から20世紀の作品が展示されている。また、素描のコレ

クションには、18世紀から19世紀のフランスの芸術家の作品が中心に所蔵され、版画コレクションには、15世紀から20世紀初頭までの主要な西洋版画家の作品が所蔵されており、これら版画・素描のコレクションは、テーマをもうけて定期的に新館の1室で展示されている。さらに、美術館前庭の《地獄の門》、《考える人》、《カレーの市民》などのロダンの彫刻作品や、カルポー、マイヨールの作品が展示されている。

## (2) 収蔵品の貸与

保存状況を勘案しつつ、国内外施設機関への積極的な貸出に努めた。

貸出点数：22点（絵画8点、彫刻5点、版画8点、書籍1点）

## (3) アンケート調査の実施

つぎのとおり、「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」、「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」、「子供から楽しめる美術展 ~ 水の誘い」、「デジタル技術とミュージアム」、「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」の展覧会、講演会、ギャラリー・トークにおいてアンケート調査を実施した。

### [ 展覧会 ]

「イタリア・ルネサンス宮廷と都市文化」  
展覧会について9割を超える肯定的意見があった。

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」  
展覧会について9割を超える肯定的意見があった。

「子供から楽しめる美術展 ~ 水の誘い」  
展覧会について9割を超える肯定的意見があった。

「デジタル技術とミュージアム」  
展覧会について9割を超える肯定的意見があった。

「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」  
平成13年度末現在において開催中の展覧会であり、引き続き平成14年度も調査を実施する。

### [ 講演会 ]

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」  
講演会について9割を超える肯定的意見があった。

「子供から楽しめる美術展 ~ 水の誘い」  
講演会について8割を超える肯定的意見があった。

### [ ギャラリー・トーク ]

「アメリカが創った英雄たち - 肖像が語るアメリカ史 / アメリカン・ヒロイズム」  
ギャラリー・トークについて参加者の大多数が肯定的意見であった。

## 3. 調査研究

### (1) 調査研究の実施

旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究を実施。

ア．旧松方コレクション、タペストリーの調査研究

（研究員氏名：河口 公夫、塚田 全彦、高梨光正）

イ．旧松方コレクション、ピストルフィ彫刻群調査研究

（研究員氏名：高橋 明也、河口 公夫、塚田 全彦、大屋 美那）

ウ．研究員氏名：幸福 輝

講 演：「西洋美術館 - 松方コレクションをこえて」

（群馬県立近代美術館、2001年9月）

エ．研究員氏名：高橋 明也

研究発表：「レオナルド・ピストルフィ（1859-1933） - 再発見された旧松方コレクションの彫刻作品群について」

（美術史学会東支部 13 年度例会、国立西洋美術館、2002 年 3 月 30 日）

講 演：「美術館へ行ってみよう」

（女子美術大学、2001 年 12 月 20 日）

執筆書誌：「再発見された旧松方コレクションのレオナルド・ピストルフィ作彫刻群について - 第一回調査報告」

（『国立西洋美術館研究紀要』no.5、2001 年）

オ．研究員氏名：大屋 美那

調査・企画：「『ロダンと日本展』(静岡県立美術館)展示作品の作家名、鑄造名、材質等に関する調査」

翻 訳：クリスティナ・ビュレイ＝ウリブ「松方とロダン美術館：あるコレクションをめぐる災厄」

（『ロダンと日本』展図録、静岡県立美術館、愛知県美術館、2001 年）

中世末期から 20 世紀初頭の西洋美術に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：幸福 輝

調査・企画：「レンブラント：神話、聖書、物語」(2003 年開催予定)

執筆書誌：「レンブラント、フェルメールとその時代」(展覧会報告)

(『国立西洋美術館年報』no.35、2002 年)

「展覧会と常設展」

(『ゼフュロス』第 10 号、国立西洋美術館、2001 年 10 月)

「美術史的主張と非美術史的展覧会」

(『西洋美術研究』no.6、2001 年 10 月)

イ．研究員氏名：高橋 明也

調査・企画：「ルーブル美術館展」(仮称)

広報・普及：「美術館この1点 - ドラクロワ《聖母の教育》」

(NHK第一放送『ラジオ深夜便』出演、2001年4月16日放送)

執筆書誌：『ゴガン - 野生の幻影を追い求めた芸術家の魂』

(六耀社、2001年)

「エドゥアール・マネの受用と創造」

(『マネ』展カタログ、府中市美術館 / 奈良県立美術館、「マネ展」実行委員会発行、2001年)

「アントワーヌ・コズヴォ作《ド・ヴィルヌーヴ・ダッシー夫人の肖像》」

(新収作品解説、『国立西洋美術館年報』no.35、2001年)

「ジャン＝オノレ・フラゴナール作《丘を下る羊の群れ》」

(新収作品解説、『国立西洋美術館年報』no.35、2001年)

「《花と果物、ワイン容れのある静物》アンリ・ファンタン＝ラトゥール、美と出会う、国立西洋美術館5」

(『東京新聞』、2002年1月13日号、日曜版)

ウ．研究員氏名：田辺 幹之助

調査・企画：「中世の工芸展」(仮称、2004年開催予定)

エ．研究員氏名：佐藤 直樹

執筆書誌：“ Die Verwandlung von Dürers Rhinoceros und sein emblematischer Charakter ”

(Aus Albrecht Dürers Welt, Festschrift für Prof. Dr. Fedja Anzelewski, Brepols, 2001)

「21世紀の美術館・展覧会へ向けて「記憶された身体 - アビ・ヴァール・ブルクのイメージの宝庫」展について」

(『変貌する美術館 - 現代美術館学 - 』、昭和堂、2001年)

「日本美術の皮膚論のために - わび が現れる場所」

(『皮膚の想像力 / The Faces of Skin』、国立西洋美術館、2001年)

『皮膚の想像力 / The Faces of Skin』

(佐藤直樹、Ch. ガイスマール＝ブランディ、I. 日地谷＝キシユネライト編集、国立西洋美術館、2001年)

「皇帝と美術 - カロリング朝と神聖ローマ帝国におけるローマ美術の復興」

(『ドイツ語圏研究』第19号、上智大学ドイツ語圏文化研究所、2001年)

「レンブラント - 帽子と外套をまとった自画像、美と出会う、国立西洋美術館 3」

(『東京新聞』、2001年12月9日)

オ．研究員氏名：田中 正之

翻 訳：ロバート・S・ネルソン、リチャード・シフ編  
『美術史を語る言葉：22の理論と実践』  
(共訳、ブリュッケ/星雲社、2002年1月)

執筆書誌：“The Uncanny and Man Ray’s Manipulation of Female Eye”  
(論文、Aesthetics、no.10、March 2002)  
「イヴ=アラン・ボア」「T・J・クラーク」  
(エッセイ、『美術手帖』2001年6月号、エッセイ、美術手帖編集部+谷川渥監修『20世紀の美術と思想』、美術出版社、2002年3月に再録)

カ．研究員氏名：高梨 光正

調査・企画：「ヴァチカン美術館展」(仮称、2004年春開催予定)

キ．研究員氏名：渡邊 晋輔

調査・企画：「大英博物館所蔵版画素描展」(2005年開催予定)

ク．研究員氏名：大屋 美那

調査・企画：「ウインスロップ・コレクション展」(2002年9月開催予定)

西洋美術作品の保存修復に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：河口 公夫

在外研修：「欧米の各美術館等研究機関の研修制度と教育科目およびその独自性と成果の調査」

(2001年9月1日～11月30日)

「最新の修復保存技術および理論研究の調査」

(2001年9月1日～11月30日)

イ．研究員氏名：塚田 全彦

執筆書誌：「国立西洋美術館における室内空気汚染調査・対策の事例」

(『国立西洋美術館研究紀要』no.6、2002年3月)

美術館情報資料に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：波多野 宏之

企画・構成：「研究資料センターの開設、公開運用」

- (2002年3月15日)
- 執筆書誌：「アート・ライブラリアン」  
 (論文、『変貌する美術館 - 現代美術館学 - 』昭和堂、2001年7月)  
 「映像技術の発展とミュージアム」  
 (論文、『映像情報インダストリアル』第34巻第2号、2002年2月)  
 「デジタルアーカイブの光と影 - 画像の複製・保存・活用を中心に - 」  
 (論文、『平成13年度(第87回)全国図書館大会記録・岐阜 2001年・岐阜・図書館の旅 - IT時代の図書館像を考える - 』全国図書館大会実行委員会、2002年3月)  
 「公開プログラム『デジタル技術とミュージアム』を開催して」  
 (エッセイ、『博物館研究』Vol.37、No.2、2002年2月)
- 講演：「デジタルアーカイブの光と影 - 画像の複製・保存・活用を中心に - 」  
 (平成13年度(第87回)全国図書館大会・岐阜 第11分科会 資料保存 基調講演、2001年10月25日)  
 「美術館ドキュメンテーションと人的資源」  
 (日本大学大学院特別講義、2002年1月23日)  
 「アート・ドキュメンテーション」  
 (2001年度中堅職員ステップアップ研修、日本図書館協会、2002年3月18日)

美術館教育に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：寺島 洋子

- 企画・構成：「子供から楽しめる美術展～水の誘い」展  
 (国立西洋美術館、会期：2001年9月14日～11月4日)  
 「子供から楽しめる美術展」(2002年開催予定)

- 執筆書誌：「学校とミュージアムの連携による教育プログラム」  
 (エッセイ、『博物館研究』Vol.36、No.5、2001年5月)  
 『プラド美術館展 ジュニア・パスポート』  
 (国立西洋美術館、2002年3月)

- 研究発表：「国立西洋美術館の教育活動」  
 (Association for Professional Librarians 定例会、2001年12月15日)  
 「海外の博物館事情：アメリカの美術館教育」  
 (平成13年度ミュージアム・マネージメント研修、国立科学博物館、2002年2月21日)

展覧会に関する調査研究を実施。

ア．研究員氏名：高梨 光正

企画・構成：「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展

(国立西洋美術館、会期：2001年3月8日～7月8日)

講演：「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演  
「ルネサンスの“ル”」

(国立西洋美術館、2001年4月14日)

「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演

(国立西洋美術館、2001年4月13日、経団連に対し講演)

「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演

(国際文化会館、2001年4月27日、イタリア研究会例会)

「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演

(国立西洋美術館、2001年5月19日、霞ヶ関婦人会に対し講演)

「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展関連講演

(国立西洋美術館、2001年5月25日、スライドトーク)

執筆書誌：Il Rinascimento in Italia: La civiltà delle corti

(「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化」展、イタリア語版  
図録、共著、共訳、責任編集：マリア・スフラメーリ、高梨光正、  
日本経済新聞社 2001年)

”Una `historia causalitatis`: Struttura della pittura narrativa del  
XV secolo”

(Il Rinascimento in Italia)

Rinascimento: Capolavori dei musei italiani. Tokyo-Roma 2001,  
Roma, Scuderia Papali al Quirinale(15 settembre 2001-6 gennaio  
2002)、カタログ編集協力

”Una `historia causalitatis`: Struttura della pittura narrativa del  
XV secolo”

(Rinascimento: Capolavori dei musei italiani. Tokyo-Roma  
2001)

イ．研究員氏名：田中 正之

企画・構成：「肖像が語るアメリカ史」展

「アメリカン・ヒロイズム」展

(国立西洋美術館、会期：2001年8月7日～10月14日)

講演：「統一の象徴としての英雄：南北戦争と歴史画」

(国立西洋美術館、2001年8月25日)

執筆書誌：『アメリカン・ヒロイズム』展図録

(国立西洋美術館、2001年8月)

- ウ．研究員氏名：田中 正之、佐藤 直樹  
 翻訳・監修：『肖像が語るアメリカ史』展図録  
 （国立西洋美術館、2001年8月）
- エ．研究員氏名：田辺 幹之助  
 企画・構成：「プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光」展  
 （国立西洋美術館、会期：2002年3月5日～6月16日）  
 執筆書誌：『プラド美術館 - スペイン王室コレクションの美と栄光』展図録  
 （国立西洋美術館、2002年3月）  
 「カール5世の遺産」  
 （論文、『プラド美術館展』図録、2002年3月）
- オ．研究員氏名：渡邊 晋輔  
 執筆書誌：『プラド美術館』展図録作品解説  
 （国立西洋美術館、2002年3月）  
 「レアンドロ・バッサーノ、『最後の審判』」  
 （作品解説、『中日新聞』、2001年11月11日日曜版）  
 「ヤコポ・ティントレット、『胸をはだける女性』」  
 （作品解説、『ヨミウリ・ウィークリー』、2002年3月3日号）  
 「ティツィアーノ、宗教を救済するスペイン」  
 （作品解説、『ヨミウリ・ウィークリー』、2002年3月10日号）
- カ．研究員氏名：波多野 宏之  
 企画・構成：「デジタル技術とミュージアム - 情報・機器展示、セミナーによる  
 公開プログラム」  
 （国立西洋美術館、会期：2001年11月13日～12月2日）  
 講演：「イコノテークの未来像 - デジタル技術でミュージアムはどこまで  
 変わるか - 」  
 （国立西洋美術館、2001年11月15日）  
 「国立西洋美術館における画像利用 - マイクロ資料と超高精細画像  
 - 」  
 （国立西洋美術館、2001年11月21日）  
 執筆書誌：『デジタル技術とミュージアム - 情報・機器展示、セミナーによる  
 公開プログラム - 展示解説』  
 （国立西洋美術館、2001年11月）

(2) 客員研究員の招聘等

客員研究員11名との調査研究・研究交流を実施。

- ア．美術館教育に関する調査研究
- イ．超高精細画像データベースシステムの構築と活用に関する調査研究
- ウ．マイクロフィッシュ等写真資料の保存と利用に関する調査研究及び助言
- エ．西洋美術関係図書資料の修復及び保存に関する調査研究
- オ．大英博物館所蔵フランス素描展企画協力
- カ．フォッグ美術館ウインスロップ・コレクション展企画協力
- キ．情報・広報事業における英語表記の助言、指導
- ク．「子供から楽しめる美術展～水の誘い」企画協力
- ケ．所蔵作品の材料分析に関する調査研究
- コ．ドーミエ作品（旧東武美術館コレクション）及び資料の調査研究
- サ．美術館における防災 - 美術館への免震システム研究

外国人研究員 5 名を招聘し、積極的な研究交流を推進。

#### 国内外の美術館等研究機関との連携

#### 4．教育普及

##### （ 1 ）資料収集及びレファレンス機能の充実

国内外の美術館等との交換図書等による資料の積極的収集を図った。また、美術情報エリア及び、研究資料センターにおいてレファレンス機能の充実を図る。

交換件数 468 件（国内 219 件、海外 249 件）

##### （ 2 ）作品データ等のデータベース化の推進

館が収蔵している作品のデータ・画像入力を行い、データベース化を推進している。

平成 13 年 6 月 12 日より、デジタルギャラリーで 204 点の公開が可能になった。（追加 22 点）

##### （ 3 ）資料閲覧室等の整備

美術研究者を対象とした研究資料センターを 14 年 3 月 15 日より開設した。

（西洋美術史研究図書等約 24,000 冊、雑誌約 1,400 タイトル、マイクロフィッシュ約 37,000 枚を所蔵）

##### （ 4 ）児童生徒に対する教育普及事業の実施

「子供から楽しめる美術展～水の誘い」展

ア．創作・体験プログラムを 4 回実施

イ．コンサート（1 回実施）

先生（小・中学校教員）のための鑑賞プログラム（2 回実施）

小・中・高等学校の先生方を対象とした特別展の観賞プログラム。展覧会の趣旨や作品

について説明した後、自由に展覧会を鑑賞。

#### (5) 講演会等の実施

企画展における講演会(17回実施)

企画展覧会の展示作品を中心に、その展覧会を理解する上で欠かすことのできない重要な歴史・文化・知識についての講演会を開催。

スライド・トーク(6回実施)

展覧会の見所、主な作品について、講堂でスライド・トークを開催。

ギャラリー・トーク(11回実施)

展覧会の見所、主な作品について、ギャラリーで解説を行った。

イヤホンガイドの実施(3展覧会で実施)

#### (6) 他機関の研修事業の実施

美術館関係者を対象とした研修事業の実施

他の機関が実施する研修・教育への協力

ア．東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻の教育・研究における連携・協力に関して協定を締結した。

イ．西洋美術史及び美術館活動に関して、大学等において非常勤講師等として教育を行った。

#### (7) 「年報」等の発行事業等

『国立西洋美術館年報 no.35 (April 2000-March 2001)』

『国立西洋美術館研究紀要 no.6』

展覧会に伴う図録の発行

『国立西洋美術館ニュース』 1回発行

第10号 平成13年10月19日発行

編集：国立西洋美術館

発行者：財団法人西洋美術振興財団

『平成13年国立西洋美術館要覧』

『展示予定表』 1回発行

#### (8) ホームページの活用

利用者にとって魅力的で、便利かつ見やすい内容とデザインとするため、ホームページデザイン及び、コンテンツの全面的な改訂を行った。

ホームページでは、コレクション、展覧会情報、講演会、スライド・トーク等のイベント、交通・利用案内、館内施設案内などを常時掲載し、適時更新を行っている。

海外からのアクセス向けには英語版のホームページを整備し、ホームページの活用と普及

及び広報体制の充実を積極的に推進している。

( 9 ) ボランティア・企業との連携等の検討

ボランティア

地域の美術館から資料を取り寄せるなど、今後の導入に向けて検討を行っている。

平成13年度「子供から楽しめる美術展～水の誘い」を実施するにあたり、大学生等ボランティア7名の参加を得て、利用者サービスの充実を図った。

企業との連携

ア 展覧会を開催するに当たり、新聞社、企業、メセナ財団より、協力及び支援を得て、企画運営、渉外、利用者サービス等の充実を図った。

イ 展覧会への協力・支援に関する特典として、特別鑑賞会を開催した。

5 . その他の入館者サービス

( 1 ) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

高齢者・身体障害者等が利用しやすい環境整備を図り、本館地下(トイレ・休憩室)階段に勾配をなだらかにし、手すりを増設する改修工事を実施した。今後も、高齢者・身体障害者等に配慮した環境整備に努める。

( 2 ) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

広報誌等の見直しを実施、広報の充実を図っている。

エントランスロビーに英語対応も可能な案内カウンターを設置し、来館者への案内、質問への対応、情報の提供等を行っている。また、サイン、休憩室の整備、車椅子や杖の無料貸出、会場内各所への休憩用椅子の配置、美術館情報・広報印刷物等の無料配布を実施し、入館者サービスの充実を図っている。

( 3 ) 鑑賞環境の充実

展示説明・構成・動線等の見直しを常に検討し、鑑賞環境の充実に努めている。また、入館者へのサービスとして音声ガイドの実施(3展覧会においてイヤホンガイド実施)及び、国立西洋美術館ガイド、展覧会案内チラシ、展示予定パンフレット並びに、展示作品リストの無料配布を実施している。

平成13年8月7日から開催の「肖像が語るアメリカ史展」では、自主企画展で初めての試みとして、JR東日本のみどりの窓口、びゅうプラザでも観覧券を販売した。

平成14年3月5日から開催の「プラド美術館展」では、初めての試みとして、小中学生向けに展覧会への理解を深めるための解説パンフレット(ジュニアパスポート)を作成し、無料で配布することとした。

( 4 ) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

小中学生の常設展入場料の無料化を、国立西洋美術館では平成14年3月5日(「プラド

美術館展」開催日)から先行して実施することとした。

入館者へのサービス向上を考慮し、展示会場の混雑対策の再検討を行い、混雑時は開館時間の延長や、開館時間を早めて対応できることとした。また、4月29日から5月5日にかかる一連の連休期間中は、休館をしないこととした。

金曜日に夜間開館(20時まで)を実施しており、観覧時間の弾力化については今後も検討を続ける。また、従来より常設展については毎月第2・第4土曜日及び、文化の日に無料観覧日を実施している。

- (5) フリーゾーンの活用、レストラン及びミュージアムショップの充実など附属施設の充実  
フリーゾーンの活用を推進し、フリーゾーンにレストラン、ミュージアムショップ、デジタルギャラリー、資料コーナーを設置。多くの人が美術館を気軽に利用でき、親しまれる美術館となるよう努めている。

レストランのメニューや店内の雰囲気、ミュージアムショップのグッズ、美術関係書籍等の品揃え、店員の接客態度などについて助言・要請・指導を行い利用者にとって快適な空間となるよう館内環境の充実を図っている。

「イタリア・ルネサンス」展においては、入館者へのサービスを図るため前庭(フリーゾーン)に郵便局の臨時出張所を招請し、「日本におけるイタリア2001年記念郵便切手」等の販売・記念押印サービスを実施した。

## 6. 職員の研修の実施

外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図っている。

職員2名を英会話研修に派遣し、意識の向上を図っている。

研究員1名がX線作業主任者免許を取得した。

## 1 収集・保管

### (1) 美術作品等の購入及び(2) 寄贈・寄託品の積極的な活用

日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、主に1945年以降の日本及び欧米の現代美術並びに国際的に注目される国内外の同時代の美術を系統的に収集している。

この基本的な方針に基づき、収蔵品の欠落部分を補い、陳列を体系的に充実させるべく、平成13年10月10日と平成14年1月30日の2回にわたり美術作品等選考委員会及び評価委員会を開催し、洋画の菅井汲《侍》他166点を計238,167,300円で購入した。また、寄贈作品10点についても同様の手続きにより、当館の収蔵品にふさわしい作品として認められた作品について、寄贈受入の手続きを行った。

### (3) 作品の保存管理

会場内では、作品を安全に展示するために館内数十箇所の温度・湿度、空気汚染、照明、防災対策、保安対策などの調査を継続的に実施し、必要に応じた改善の実施を行っている。

また、収蔵庫の温度・湿度のデータの管理により、作品への影響を最低限とするよう空調設備の運転を行っている。

### (4) 収蔵品修復

緊急に修復を必要とする収蔵品のうち、緊急性の高いものから計画的に修復を行った。

## 2 公衆への観覧

### (1) 展覧会の実施

「世界四大文明 エジプト文明展」

期 間：平成13年1月13日(土)～4月8日(日)(74日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 75点

入場者：総数 404,825人 (1日平均 5,471人)

内13年度(平成13年4月1日(日)～4月8日(日))(8日間)

入場者：総数 80,962人 (1日平均 10,120人)(目標入場者数：34,000人)

共催者：NHK大阪放送局、NHKきんきメディアプラン

「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」

期 間：平成13年4月26日(木)～6月10日(日)(40日間)

関西ドイツ文化センターと共催

会 場：国立国際美術館

出品点数 350点

入場者：総数 8,825人 (1日平均 221人)(目標入場者数：4,000人)

「宮崎豊治 - 眼下の庭 - 」

期 間：平成13年6月21日(木)～7月22日(日)(28日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 49点

入場者：総数2,137人 (1日平均76人)(目標入場者数：2,800人)

「ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 」

期 間：平成13年8月2日(木)～9月2日(日)(28日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 100点

入場者：総数3,716人 (1日平均133人)(目標入場者数：2,800人)

「田中信太郎 - 饒舌と沈黙のカノン - 」

期 間：平成13年9月13日(木)～10月14日(日)(28日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 34点

入場者：総数2,982人 (1日平均107人)(目標入場者数：2,800人)

「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」

期 間：平成13年10月25日(木)～12月11日(火)(42日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 66点

入場者：総数6,241人 (1日平均149人)(目標入場者数：6,000人)

共催者：(財)ダイキン工業現代美術振興財団

「《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 」

期 間：平成13年12月20日(木)～平成14年2月3日(日)(33日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 66点

入場者：総数2,737人 (1日平均83人)(目標入場者数：2,000人)

「O JUN」

期 間：平成14年2月14日(木)～3月26日(火)(36日間)

会 場：国立国際美術館

出品点数 123点

入場者：総数7,277人 (1日平均202人)(目標入場者数：3,600人)

国際交流展「安斎重男展」

会 場：ポーランド ブンケル・シュトゥューキ現代美術ギャラリー

## クラクフ

共催者の都合で平成14年に開催  
(平成14年9月6日(金)～10月6日(日)開催予定)

### 地方巡回展の実施

国立博物館・美術館巡回展

「信仰と美術」

期 間：平成14年1月12日(土)～2月10日(日)

会 場：和歌山県立博物館

独立行政法人国立博物館(奈良国立博物館)と共催

入場者：総数 2,737人 (1日平均 83人)

期 間：平成14年2月19日(火)～3月21日(木)

会 場：徳島県立博物館

独立行政法人国立博物館(奈良国立博物館)と共催

入場者：総数 4,304人 (1日平均 159人)

### (2) 収蔵品の貸与

国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施した。

13年度貸出件数 27件 貸出作品総数 117件

### (1) アンケート調査の実施

下記の展覧会においてアンケート調査を実施した。

[展覧会]

「ドイツにおけるフルクサス 1962-1994」

展覧会について8割の肯定的意見があった。

「宮崎豊治 - 眼下の庭 - 」

展覧会について9割の肯定的意見があった。

「ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 」

展覧会について9割の肯定的意見があった。

「田中信太郎 - 饒舌と沈黙のカノン - 」

展覧会について9割の肯定的意見があった。

「主題としての美術館 - 美術館をめぐる現代美術 - 」

展覧会について8割の肯定的意見があった。

「《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 」

展覧会について9割の肯定的意見があった。

「O JUN」

展覧会について8割の肯定的意見があった。

### 3 調査研究

#### (1) 調査研究の実施

欧米の現代美術に関する調査研究(5名、12件)

ア. 研究者氏名: 中井康之

執筆書誌: 「アルテ・ポーヴェラ 現代イタリア美術の一動向」  
『美術の窓』No.212(2001年5月号)

イ. 研究者氏名: 安來正博

講演: 「マーク・ロスコとアメリカ美術」  
和歌山県立近代美術館 2002年2月  
執筆書誌: 「作品解説 パブロ・ピカソ《道化役者と子供》」『ダイキン・タイムス』  
2001年12月号

ウ. 研究者氏名: 中西博之

執筆書誌: 「あらゆるコミュニケーションはコラージュである  
(ヨハネス・クラッダース、ガブリエレ・クナップシュタイン)」  
(独文和訳)『ドイツにおけるフルクサス 1962 - 1994』展カタログ  
[日本語翻訳冊子] 2001年4月 国立国際美術館  
「展覧会出品作品紹介 クリスチャン・フィリップ・ミュラー  
《椅子としての国立国際美術館の肖像》」  
『国立国際美術館月報』No.110(2001年11月号) 国立国際美術館  
「美術館についての美術展」  
『主題としての美術館 美術館をめぐる現代美術』展カタログ  
(リーフレット) 2001年11月 国立国際美術館  
「展覧会出品作品紹介 メル・ジューグラー《無題(エア・フィルター)》」  
『国立国際美術館月報』No.112(2002年1月号) 国立国際美術館

エ. 研究者氏名: 加須屋明子

執筆書誌: 「館蔵品紹介 ローリー・トビー・エディソン  
《トレーシー・ブラックストーン&デビー・ノトキン》」  
『国立国際美術館月報』No.107(2001年8月号) 国立国際美術館  
「ローリー・トビー・エディソン 覆す力」  
『近作展-26 ローリー・トビー・エディソン - からだへの瞑想 - 』  
リーフレット 2001年8月 国立国際美術館

オ. 研究者氏名: 平芳幸浩

執筆書誌: 「ポップ・アートとレディ・メイド - vulgarity の表象を巡って - 」  
『美学』No.204(2001年春号)  
「WDR(西部ドイツ放送)の音響芸術スタジオで上演されたフルクサス・

ラジオ・アート(クラウス・シェーニク)」  
(英文和訳)『ドイツにおけるフルクサス 1962 - 1994』展カタログ  
[日本語翻訳冊子] 2001年4月 国立国際美術館  
「展覧会出品作品紹介 ジョージ・マチューナス《フルックスキット》」  
『国立国際美術館月報』No.104(2001年5月号) 国立国際美術館

日本の現代美術に関する調査研究(3名、8件)

ア. 研究者氏名: 島敦彦

執筆書誌:「展覧会出品作品紹介 0 JUN《拳兵図》」  
『国立国際美術館月報』No.113(2002年2月号) 国立国際美術館  
「0 JUNの纏うもの」  
『近作展-27 0 JUN』リーフレット 2002年 国立国際美術館

イ. 研究者氏名: 中井康之

執筆書誌:「館蔵品紹介 田中信太郎《マイナー・アート A.B.C.》」  
『国立国際美術館月報』No.103(2001年4月号) 国立国際美術館  
「二人の田中信太郎」  
『田中信太郎 饒舌と沈黙のカノン』展カタログ 2001年9月  
国立国際美術館  
「展覧会出品作品紹介 田中信太郎《点・線・面》」  
『国立国際美術館月報』No.108(2001年9月号) 国立国際美術館

ウ. 研究者氏名: 安來正博

執筆書誌:「展覧会出品作品紹介 宮崎豊治《身辺モデル - 類似化》」  
『国立国際美術館月報』No.105(2001年6月号) 国立国際美術館  
「“身辺モデル”から“眼下の庭”へ 身体と風景をめぐる宮崎豊治の  
試み」 「年譜・文献目録」  
『宮崎豊治 眼下の庭』展カタログ 2001年6月 国立国際美術館  
「宮崎豊治 “眼下の庭” 鉄の彫刻に刻まれた身体と風景」  
『オール関西』7月号

日本及び周辺領域の現代美術に関する調査研究(2名、3件)

ア. 研究者氏名: 安來正博

執筆書誌:「コレクション 国立国際美術館」『博物館研究』第37巻第3号  
(2002年3月)

イ. 研究者氏名: 加須屋明子

研究内容:「ポストメディア論 - 電子時代における芸術作品 - 」  
2001年度科学研究費補助金(萌芽的研究、継続)

「四大（地・水・火・風）の感性論：思想・アート・自然科学の関わり  
についての基盤研究」

2001年度科学研究費補助金（基盤研究）研究分担（代表 岩城見一）

絵画・版画等に関する調査研究（2名、5件）

ア．研究者氏名：安來正博

執筆書誌：「館蔵品紹介 野田裕示《WORK-641》」

『国立国際美術館月報』No.109（2001年10月号） 国立国際美術館

「石垣栄太郎の存在」

『美術運動史研究会ニュース』 2001年9月

口頭発表：「フォト・デッサン 瑛九による絵画的写真表現の試み」

日本映像学会関西支部第36回研究会 2001年12月 関西学院大学

イ．研究者氏名：平芳幸浩

執筆書誌：「展覧会出品作品紹介 秋岡美帆《光の間》」

『国立国際美術館月報』No.111（2001年12月号） 国立国際美術館

「イメージをめぐる」

『《現代美術へのいざない》アフター・イメージ - 残像 - 』展

リーフレット 2001年12月 国立国際美術館

彫刻・インスタレーション等に関する調査研究（3名、4件）

ア．研究者氏名：島敦彦

執筆書誌：「館蔵品紹介 岡崎和郎、瀧口修造《検眼図》」

『国立国際美術館月報』No.106（2001年7月号） 国立国際美術館

イ．研究者氏名：中井康之

執筆書誌："MONO-HA"

Le Tribu dell'Arte Galleria Comunale d'Arte Moderna e Contemporanea ,  
Roma , 2001

ウ．研究者氏名：安來正博

執筆書誌：「展覧会出品作品紹介 宮崎豊治《身辺モデル-類似化》」

『国立国際美術館月報』No.105（2001年6月号） 国立国際美術館

「企画展 宮崎豊治-眼下の庭」『文化庁月報』2001年6月号

他の美術館等における調査研究に対する協力（1名、1件）

ア．研究者氏名：三木哲夫

執筆書誌：「1920年代の創作版画運動 展覧会を中心に」

『日本の版画 III 1921-1930』展カタログ 2001年9月

千葉市美術館・中津市教育委員会芸術文化センター建設準備室・  
宇都宮美術館

調査協力：南桂子作品及び文献の調査協力

「南桂子・宮脇愛子展」 高岡市美術館

2001年7月3日(火)～9月2日(日)

#### 4 教育普及

##### (1) 作品データ等のデータベース化の推進

収蔵作品(4,195点)のデータ・画像入力を行い、データベース化を推進した。

13年度は文字データ179件、画像データ100件(2月末現在)の入力を行い、この結果、文字データについては、全収蔵作品、画像データについては、1,305点が入力済みとなった。

##### (2) 児童生徒に対する教育普及事業の実施

児童生徒を対象とした次の教育普及事業を実施した。

子どものためのワークショップ 4回 総参加者数97名

子どものためのビデオ上映 4回 総参加者数53名

##### (3) 講演会等の実施

講演会	5回	総参加者数570名
ギャラリー・トーク	7回	総参加者数392名
シンポジウム	1回	総参加者数80名
パフォーマンス	2回	総参加者数600名
映画上映	2回	総参加者数420名
ビデオ上映	5回	総参加者数111名

##### (4) 他機関の研修への協力

美術館関係者を対象とした、次の研修事業を実施した。

ア．中級学芸員実務研修として愛媛県美術館学芸員1名を受入れた。

他の機関が実施する研修への協力を実施した。

ア．文化庁が実施する中級学芸員研修

45機関45名受入

イ．大学生の学芸員資格取得のための博物館実習への協力

15大学21名受入

##### (5) 「年報」等の発行事業等

研究成果を踏まえて次の出版事業等を行った。

「平成12年度年報」

「国立国際美術館概要」

「国立国際美術館概要」(英文)  
展覧会に伴うリーフレットの発行  
「ジュニアガイドブック」  
「月報」 12回発行  
展覧会案内  
展覧会案内英文

(6) ホームページの活用

ホームページを積極的に活用して広く公衆への普及及び広報を行った。

5 その他の入館者サービス

(1) 高齢者・身体障害者等に配慮した設備等の充実等

高齢者等に配慮した設備等の充実を図った。

(2) 案内情報の充実、車椅子の提供等、入館者サービスの充実

案内情報の充実、入館者サービスの充実を図った。

(3) 鑑賞環境の充実

展示説明の見直しなど、鑑賞環境の充実に努め作品リストの無料配布等を行った。

(4) 小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討

小中学生の常設展入場料の無料化や観覧時間拡充の検討を行い、教育普及のため平成14年4月1日から小中学生の常設展、企画展の入場料の無料化を行うこととなった。

また、当館では、それに併せ新館移転までは、建物の構造上の点及び現代美術の教育普及のため特別展も無料とすることとした。

観覧者サービスのため夜間開館を4回実施した。総入館者数385名

6 職員の研修の実施

(1) 館内において接遇研修を実施した。

(2) 人事院研修へ派遣、参加させた。

(1名) 近畿地区係長研修 平成13年7月3日(火)～7月6日(金)

## 決算の概要

### (1) 運営状況

国立美術館の収入は、国から交付される運営費交付金と入場料収入などの自己収入とからなる。運営費交付金については予算どおり 4,425 百万円が国から交付された。これに対し、自己収入については入場料収入が予算よりも増加したことなどにより、展示事業収入は対予算比 63 百万円増の 364 百万円となり、展示事業収入の増加に加えて、消費税等還付税額が 1,180 百万円見込まれることなどから、自己収入は対予算比 1,253 百万円増の 1,553 百万円となった。よって、収入合計は対予算比 1,253 百万円増の 5,979 百万円となった。

国立美術館は運営費交付金と自己収入を人件費と業務経費に支出した。人件費については、定員に欠員があるにもかかわらず補充を次年度に見送ったことから、対予算比 32 百万円減の 1,070 百万円となった。業務経費については、展覧事業費が対予算比 136 百万円増の 2,166 百万円となったものの、一般管理費が対予算比 105 百万円減の 953 百万円になり、調査研究事業費が対予算比 90 百万円減の 170 百万円、教育普及事業費が 45 百万円減の 227 百万円となり、業務経費合計では 105 百万円減の 3,518 百万円となった。よって、支出合計は対予算比 138 百万円減の 4,588 百万円となった。

以上のように、収入合計で対予算比 1,253 百万円増加し、支出合計で対予算比 138 百万円減少していることから、収支差額は 1,391 百万円の収入超となった。これに対し、消費税等還付税額 1,180 百万円を臨時利益に計上し、美術品・収蔵品の取得にかかる購入費等 74 百万円を運営費交付金債務として繰り越していることから、国立美術館の業務活動から生じた経常利益は 136 百万円となった。経常利益に加えて、消費税等還付税額 1,180 百万円を臨時利益に計上したことから、当期総利益は 1,316 百万円となった。

### (2) 財政状態

国立美術館は、独立行政法人の設立に当たり東京国立近代美術館の工芸館・フィルムセンター、国立西洋美術館、京都国立近代美術館について国から土地・建物等 25,630 百万円の現物出資を受けた。また、東京国立近代美術館本館については平成 14 年 1 月のリニューアルオープンに伴い、国から建物等 8,018 百万円の現物出資を受けた。

以上により、33,648 百万円を政府出資金として計上した。

なお、現物出資された固定資産のうち償却資産については、文部科学大臣より「その減価に対応すべき収益の獲得が予定されないもの」として特定されているので、当該資産の減価償却相当額は、損益計算上の費用には計上せず、損益外減価償却累計額として資本剰余金を減額している。第 1 期事業年度の損益外減価償却相当額は 998 百万円であった。

美術品・収蔵品については独立行政法人設立時に国から無償譲与を受けており、その評価額は 36,874 百万円である。また、第 1 期事業年度中に運営費交付金により 1,112 百万円購入し、382 百万円の寄贈を受けた。

以上により、美術品・収蔵品は第 1 期事業年度に 38,369 百万円増加した。美術品・収蔵品の取得は中期計画において想定されており、国立美術館の財産的基礎を構成するものと考えられるので、同額を資本剰余金として計上した。

(3) キャッシュ・フローの状況

業務活動については、美術品・収蔵品の購入による支出が947百万円あり、人件費の支払が1,197百万円、業務経費の支払が1,657百万円あった。これに対し、運営費交付金収入が4,425百万円、自己収入が366百万円あることから、業務活動によるキャッシュ・フローは989百万円の資金増となった。投資活動については有形固定資産の取得による支出が58百万円あることから、投資活動によるキャッシュ・フローは58百万円の資金減となった。

以上により、第1期事業年度のキャッシュ・フローは931百万円の資金増となった。

(4) 行政サービス実施コストの状況

行政サービス実施コストとは「独立行政法人の業務運営に関して国民の負担に帰せられるコスト」を意味するものである。行政サービス実施コストは、業務費用、損益外減価償却相当額、引当外退職手当増加見積額、機会費用の合計額になる。

業務費用については損益計算書上の費用4,190百万円から自己収入1,553百万円を控除し、2,636百万円となる。業務費用に加え、損益計算上の費用に計上されないコストとして、現物出資資産の減価償却相当額を998百万円計上し、役職員の退職手当増加見積額を65百万円計上し、国から無償貸与されている国立国際美術館の建物等の賃貸料相当額などを143百万円計上し、政府出資等を他の資産に運用したら得られたであろう収益相当額を932百万円計上した。

以上により、国立美術館の業務運営に関して国民の負担に帰せられるコストは4,775百万円と見積もった。

(金額は百万円未満切捨)

## 対処すべき課題

独立行政法人国立美術館は、平成13年4月に策定した「中期計画」に沿って、その実現に向け法人全体で取り組んでいる。

この計画では、国立美術館に対する国民の多様なニーズに応えるため、多方面にわたる事業の展開を予定している。これらの活動を行っていくため、運営費交付金の効率的な執行を行うとともに、自己収入の一層の拡充に資するため、寄附金等外部資金の導入も必要と考えられる。

また、作品の保存機能を十分に果たすと同時に良好な観覧施設として入館者への観覧環境の維持のため、長期的な視野に立った計画的な施設・設備の整備を推進していくことも必要である。